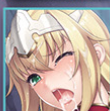


# ★☆☆★ 三次元 プリンセスがゴジン

2017  
02  
Volume.92  
DIGITAL EDITION



ぼっしゅい 竜胆  
うるし原智志

カラー  
ピンナップ  
color pinup

# ビキニ

今号の特集  
Special Feature Series

小さま装束は戦士の矜持  
淫猥な触手には屈しない

# 女戦士

【連載&読み切り小説】

最終回

## 欲望特急

スレイブハンサー搾精捜査  
冬野ひつじ×sasana

黒名ユウ×ピストンリング西沢  
江口ヒロヨシ×竜胆  
桜空×8000  
上田なかの×恋河ミノル  
新居佑×三ツ葉穂  
風舞尻子玉×アマミヤ  
桃生雨京×ダイヤル  
酒井仁×桐島サトシ

【えっちマンガ&4コママンガ】

はふえめ  
ゆたかめ  
李星  
仁志田メガネ  
時丸佳久  
嘉納あいら



あの人気PCゲームが  
漫画になって登場!

コミカライズ  
新連載

# 粘獄のリーゼ

楠木りん

試し読み版

18  
未 満

表紙&ピンナップテレホンカード  
応募者全員サービス



竜鎧の騎士

# サファイアール

肉悦の奈落に墮つ

えぐち  
小説 NOVEL 江口ヒロヨシ

りんどう  
挿絵 ILLUSTRATION 竜胆

ビキニ鎧をずらされ現れる  
発情した牝の肉体!



キラキラと輝く金髪を風に靡かせ、サフィールは愛馬に跨がり、領内を巡回していた。

そのつり目がちな澄んだ青い双眸は、油断なく山道の周囲を睨んでいる。

最近、この地で何人も人間が行方不明になるといふ事件が起きていた。領主による捜索隊が何度となく編成されたが、全て空振りに終わっていた。

サフィールは大陸を統べるオーランド王国の騎士の名家に生を受けて以来、男も敵わぬ猛勇で知られ、これまで討伐した山賊は数十を下らず、他国との戦争においても無敗を誇っていた。そんな彼女は王からの勅命を受け、神隠しが続発しているオーランド王国の南方にある、ここ、コエン領に赴いていた。

領主から話を聞いた限り、ここ最近、山賊の類いの報告はない。サフィールが単騎で行動中なのは、まず、この領内をしっかりと把握するためだった。

案内役をと領主は言ってくれたが、自分の目で見、自分の勘に従うほうがうまくいくことを経験的に知っていた。

(それにしても、やはりこの鎧は目立つわね。覚悟はしていたけど、やっぱり恥ずかしい)

ここに来るまで幾つかの村を通ってきたのだが、どこでもサフィールの奇抜な姿は人々の目を集めた。中にはサフィールを旅の踊り子か何かと勘違いして、金で買おうとしてきた輩もいるが、正直、そういう連中を責めることはできなかった。

(私だって、こんな格好の人間がいたら間違えてしまうかもしれない)

サフィールは自分の纏う鎧をまじまじと見つめる。鎧と言えば普通、金属を材料にしたものを想像するだろうが、サフィールのものは違う。まるで水練の際に用いるような布きれで、とても鎧とは言えない。それで豊かな胸と秘処とを辛うじて守っている程度でしかない。しかしこの布こそ、これまでのサフィ

ールを支えてくれた相棒だった。

厳密に言えば、布ではなく、皮膜だ。雪と氷に閉ざされた北方大陸に棲まう、サファイアドラゴンの革を使い、名工が十人、百日の間、鍛え続けてようやく造り上げたという伝説の秘宝であった。サファイアドラゴンの魂が凝縮された皮膜は、それを纏う者に人知を超えた力を与える。こんな形になってしまっているのは皮膜から余計なものをこそぎ落としていった結果、サファイア色をしたこのみが残った結果なのだという。この皮膜は肌を吸い付き、よく見れば、乳頭や秘処の割れ目をうつすらと透かしていた。これまで何度か耐えきれず、この上から鎧を纏ったのだが、そうすると本来、引き出される力が半減してしまう。さらに濡れることに弱い。きつと水と雪に閉ざされた北方に棲まうサファイアドラゴンが雨を知らないせいだろう。

(これがなければ私は十分に陛下にお仕えできず、民を助けることもままならなかった。恥ずかしさごとき、騎士が耐えられなくてどうするの!)

そういう思いがあるからこそ、サフィールは常に背筋を伸ばし、胸を張っていた。乙女の羞恥心など輝かしい武勲の前では霞んでしまうのだから。(ん?)

木立の合間に何かを見つけ、目を凝らす。中年くらいの男だった。山奥だというのに軽装の男は酔っているかのように、足取りが危うい。にもかかわらず、まるでどこかへ導かれるように奥へ奥へと進んでいく。

「ちょっと!」  
呼びかけるが男は気づかない。  
馬を駆け、追いかければ忽然と男の姿が消えた。(これは)

サフィールが男がいたはずの場所へ駆けつけければ、そこにはぼつかりと大きな口を開けた穴が広がって

いた。直径は大人の男が両腕を一杯に広げたくらいだろうか。

(この匂いは何?)  
穴からは妙に甘ったるい臭気が立ち上る。鳥肌が立った。

(これはただ事じゃないわ。応援を……。いえ、それではさっきの人が手遅れになってしまうかもしれない……)

決断は早かった。  
サフィールは下馬すると、傍の木立に結わえた縄を命綱としながら、穴を下っていく。  
底へ下りていくにつれ、あの甘ったるい臭気はますます濃厚になり、咽せてしまおうだった。  
そうしてどうにかこうにか、底に辿り着く。

「な、何よ。ここ……」  
地面はぶよぶよとして柔らかい。  
声の響きを考えると、かなりの広さの空洞だった。  
「今日は何についてるな。ゲへへ。餌だけじゃなくて、玩具まできたかあつ!」

暗闇の中に声が響き渡る。  
「どこだつ!」  
サフィールは背中を負っていた剣を握りしめる。

「俺か? 俺はあ、ここだあつ!」  
(下!!)  
その時、踏みつけていた足場から何か伸びてきた。(しまった!)

気づいた時にはもう遅い。ヌルヌルした粘液にまみれた触手が、手首と足首に巻き付いていた。

「何!」  
鬼火のような青白い炎がボウツ、ボウツと宙に現れ、暗闇を照らす。  
サフィールが踏みつけていたのは地面などではない、青白い表面をした怪物そのものだった。

「そいつは目や口がでんでバラバラの場所に存在し、その肉体から大小様々な触手を生やしていた。」

「お前が、人々を……」

「そうとも。甘あい甘あい匂いでおびき出したのさ。安心しろ。あいつらは夢心地で俺の腹ん中さあ！」

「化け物めつ！ 私が成敗してくれるっ！」

「サフィールは全身に力を込め、巻き付く触手を剛力でふりほどく。」

「ほう……。その力……。そうかあ」

「死になさい！」

「剣を薙ごうとした刹那、無数の触手から吐き出された粘液をまともに浴びてしまう。」

「……！」

「どろりとした粘汁が皮膜を濡らした。」

「それまで全身に漲っていた活力が失われ、膝を折ってしまふ。」

「サファイアドラゴンの革……。人間相手には活躍しただろうが俺には無駄だあつ！」

「くっ！」

「再び触手に手足を捉えられてしまふ。」

「どう足掻こうが、先程のような力を発揮することができなかつた。」

「見れば見るほど、美しい女だ。げへへ、安心しろ。俺は女には優しいんだ。すぐに殺すようなことはない」

「は、放せ！ 放せえ……。っつ！」

「どれほど声を張り上げてても、それはただ広い空洞内で虚しく反響するばかり。」

「そんな胸を揺すらずとも、すぐに触ってやる」

「二本の触手が伸びてくると、胸に巻き付く。」

「ん……。っ！」

「ひんやりした粘液の冷たさに、声の上擦ってしまふ。醜悪な触手が食い込めば、豊かな乳房が卑猥に歪められた。」

「おお、こりやあ、数百年ぶりの上玉。肌はすべすべ、いい匂いがしやがるぜえ」

「やめ、ろおつ……。っく……。な、何をしようが、私は、化け物ごときに屈するつもりなど、ないっ！」

「ほう。それは威勢の良い……。だが、いつまでそんなことを言っていられるかなあ？」

「何……。っくう!!」

「それは唐突に訪れた。」

「発作のような衝動に貫かれたと思った矢先、身体が燃えるように熱くなったのだ。」

「わ、私に、な、何を、した!!」

「胸の奥や、秘処のあたりが強い疼きに晒されてしまふ。」

「俺の体液は女を悦ばせるのさあ。ゲへへ。どうだあ？ たまんねえだろお？」

「よ、悦ばせる？ 何を、馬鹿な……。ひゃあんっ！」

「鋭い痺れが弾けた。」

「驚いて見れば、サファイアドラゴンの皮膜でできた胸当ての部分に細い触手が絡みつき、両方の乳頭を絞り上げていた。」

「な、何、今の……？」

「目も眩むようなショックに、サフィールは肩で息をせざるをえない。」

「快感だよ、騎士殿」

「快感!! そんなもので、この私をどうにかできると、思つて……。ひいひいん!!」

「乳頭への圧迫感がさらに強まれば、性感帯を掻き巻く鋭い刺激に身体を弓反らせてしまふ。」

「見るがいい、騎士殿。何にも感じてないような女の乳首がこんなにもいやらしく勃起してると思ふか？ ええ？」

「皮膜を押し上げるほど乳首は膨らんでいた。」

「ちっ、違う！ こんなのは、違うわ……。断じて！ これは、お、お前のせいよ！ 私が感じてるわけじゃないわっ！」

「騎士殿はたいそう頑固らしい。どんな女も一皮剥けばただの牝。それがわからないのか？」

「ぶ、侮辱は許さないわよっ！」

「こうしている間にも魔物の毒素はサフィールの清らかな身体を狂おしくしていた。」

「刺激に晒され続ける乳頭が灼けるようだ。」

「さらにその異変は秘処にも及ぶ。」

「ジクジクと強く疼き、何かに炙られるようだ。本当であれば足をすり寄せ、紛らわしたいところだが、それも叶わない。」

「んん？ 腰を揺すってどうした、騎士殿？」

「魔物が嘲笑混じりに言う。」

「な、何でも、ないわ……。っ」

「しかしその声は小さく、上擦る。」

「ほう、俺はこつちが寂しいのかと……」

「ひいひいひいひいひい!!」

「太い触手に鎧ごしに股座を擦られた瞬間、目の前が白く明滅した。」

「……。っ！」

「直後、身体から力が抜け、膝がくの字に折れてしまふ。」

「ゲへへへ、どうやらいつたみたいだなあ、騎士殿」

「な、に？」

「頭がぼうつとして、何も考えられない。全身は小刻みに震えっぱなしで、呼吸が荒くなる。」

「いったと言つたんだよ。騎士殿は、女の悦びを知らないのか？」

「黙りなさい！ 何を、さ、さつきから、わけのわからないことを！」

「騎士殿はご自分で慰めたことはないのか？」

「慰める？ け、穢らわしいことを……。騎士が、そんなこと、するはずがない！」

「サフィールは頬を火照らせ、弱々しく反論する。」

THE DESIRE EXPRESS  
**欲望特急**

スレイバーサー  搾精捜査

【4日目 朝比川～和寒内】 獣達の終着駅



**肉体開発**を許した代わりに得た**代償**  
**検査結果に驚き**の色を隠せない――！

とうの  
小説 **冬野ひつじ**  
NOVEL  
挿絵 **sasana**  
ILLUSTRATION

■ 08 : 22 渡嶋 わたのしま デラックススイート内

(昨日のアレは夢だったのよね……? バイブを入れたまま接客して……皆の目の前で、見られながらイッたなんて……)

湿った空気の中で、理緒は額に汗を浮かべてうなされていた。

(そうよ、夢に決まってる……だって、もしあの夢が現実だったとしたら、私はもう……)

自分を見下ろす乗客達の驚愕した表情。股間から飛び出したウネウネと蠢くバイブ。そして、絨毯に飛び散った誤魔化しようのない愛液の染み――。

(そんなはずない……あれは全部夢……だから、もう起きないと……起きて、捜査を……)

女捜査官は昨夜の己の狂態が全て夢であった事を祈りながら目を覚ました。

だが、臉を開くと同時に襲ってきたのは深い絶望だった。

頭上には優美な曲線を描くシャンデリア。

そこは紛れもなく、黒岩のデラックススイートルームだった。

(私、ずっとここに寝かされていたの……!?)

耳を澄ませたが部屋には誰もいない。カーテンで閉ざされた窓の向こうの様子も分からない。腕時計を慌てて覗き込み、理緒は頭を抱えた。

(もう朝だ……多分、ラウンジからそのまま……)

柔らかなベッドの上で、理緒はパンプスを履いたまま横たえられていた。制服もそのまま、まだ濡れているスカートの裏地が内腿に張り付く。

「ん……ッ」

脚を動かした途端に膣口から蜜が溢れ落ちて、身体が震えた。

(皆に全部見られたんだ……きつと、いや、間違いない)

なく鶴飼さんの耳にも届いている……ああ……私、どうしたら……)

衆目に晒してしまったあの卑猥な姿は、もう誤魔化しようがない。床に倒れ込み、尻を突き出した格好を、まるで肉棒をねだるかのような卑猥な腰つきを、腿の間から垂れ流した蜜の滴りを、全てを乗客と同僚の目に焼き付けてしまったのだ。

(あんな姿を乗客達に印象付けてしまった以上、パーサーとして捜査を続けるのは難しくなってしまう……でも……)

最後の希望に縋るようにして女捜査官は身を起さず。そっと触った内ポケットに通信機は入ったままだ。

(でも、サンプルの鑑定結果は、今度こそ間違いなはず……! あとは連絡を待つだけ……)

もう一度見た腕時計の秒針は、何事もなかったかのように時を刻んでいる。その正確さが今は心強い。

(たとえ私と連絡が取れなくても、結果が出れば本部はすぐに終点へ捜査員を向かわせるだろう……)

こうなれば、どんな形であれ終着駅にさえ辿り着き、黒岩の手に手錠がかけられる瞬間に立ち会えばそれで十分だと思ってしまう。

(私が自分で逮捕したかったけど、もうそんな事に拘っている場合じゃない! とにかく乗務員室に行こう。その後の対応はそこで考える……!)

勢いをつけて絨毯の上に降りたその時、

「やつと目が覚めたようだな、お姫様」

部屋の突き当たり、隣室と繋がるドアが開き、黒岩が姿を現した。

「ひよつとして、このまま目が覚めない方が良かった……という気分か?」

反応を愉しもうというのか、立ち上がった理緒に慌てるでもなくこちらに向かってくる。

「フフッ……そんなに落ち込まなくても、思いがけ

ないサブライズにラウンジの皆は随分と悦んでたよ、理緒君」

「あんなのがサブライズって……いくらなんでも、あ、あんまりです……ッ!」

まだ自分をパーサーと信じ込んでいるらしい容疑者に、それでもパーサーとしては失格になるであろう怒りの視線を理緒はぶつける。

「あんな醜態を晒してしまつては……私、もう二度とお客様の前には……!」

だが、すぐに目を伏せ、しおらしい声で嘆いて見せた。ここで男達に疑念を持たれるような真似を見れば、取り逃がしてしまう羽目にもなりかねない。

(今はまだ耐えないと……終点までコイツらを降ろさないと……) 引き付けておくのが今の私にできる仕事なんだから)

「できる事ならこのまま終点までここに置いていただきたいくらいですわ……!」

深々と溜息を吐き、理緒は両腕で自分を抱いて見せる。

(どうせこのままコイツはここで私をまた弄ぶ……下手に動き回られるより、こうなつてしまった以上はその方がいい……ただ、あとの三人はどうしたの……?)

「ならちようどいいさ、ここでこのまま真寄まよに着くまで俺の相手をしてればいい」

「か……畏まり……ました……!」

従順な様子のパーサーを、黒岩は舐め回すようにして眺める。

「何か……?」

「いや、今日でこの旅も終わるのかと思うと感慨深くてな……ふむ……見れば見るほど本当にイイ女だ……フフッ、どうすればこのまま連れて行けるかな……?」

言いながら黒岩は理緒の顎を持ち上げ、唇の裏に

親指を潜り込ませた。口から出まかせの戯言だと分かっただけでも、男の言葉に一瞬背筋がヒヤリとなる。

「バカね、袋の鼠も同然なのに……呑気な事を言ってるのともあと少しね」

「あ……ふうッ、私も……黒岩様には色々教えていただきました……」

苛立ちを噛み殺し、偽りの謝辞と共に女捜査官は媚びた視線で応える。

「四人分のサンブルのうち、一人でも合致すれば、残り三人も参考人として聴取に持ち込める……この四日間私にした事も含めて、この男は全ての悪事を暴かれる……」

「黒岩様の事は、絶対に忘れませんわ……」

理緒はゆっくりと、言葉を刻んだ。

「（そしてもう少しでコイツも、私の事はもう二度と忘れられなくなる……!）」

「ああ、忘れられないようにしてやるさ……」

黒岩はそのままベッドに腰掛けた。

「今だって、こうして指だけでも……ほら、感じるんだらう？」

「んふうッ、は、はい……黒岩様に躡けていただけのおかげで、んちゅッ、おもてなしの心が、んッ、分かったような気がします……」

「そうか……フッ、可愛い事を言うじゃないか……」

理緒は床に膝を突いたフェラチオの体勢で、ペニスの代わりに太い指を受け入れる。

「（まずは指をしゃぶれって事……？ 単純な男で、助かったわ……）」

ツルツルとした感触を愉しむかのように、男は指を菌茎に何度も往復させ、

「んぶッ……!？」

く。

「んぐ……ッ、んちゅ……」

即座に男の意図を読み取り、理緒は切なげに瞳を伏せて見せながら、愛しげに男の指に舌を這わせ始めた。

「ちゅ……ッ、ぶちゅッ、んぐ……ッ、んちゅ……ッ」

時折口を窄めながら軽く吸うと、男は満足気な息を吐く。

「ああ、いい仕上がり具合だ……その目もイイ……ゾクゾクするよ……」

口唇奉仕をしばらく愉しむと、黒岩は指を引き抜き、唾液でべつとりと濡れたそれで、再び理緒の唇をなぞる。

「なんだ、もうすっかり牝の顔に戻ってるぞ……?」

「そんな……恥ずかしいですわ……」

消え入りそうな声で応えた方が、この男は反応がない。

そんな考えが浮かぶ前に、既に乙女の背筋には官能の電流がパチパチと走り始めていた。

「だから素質があるって言っただろ？ 俺はな、女を見る目に狂いはない」

その一言に嫌悪感を呼び起こされ、理緒は慌てて官能を振り払おうとした。

「違う……! こうやって、唇を弄られただけで感じたように見せていれば、この男は油断するから……だから……!」

だが、調教済みの身体は易々と理性を裏切るとうとする。

「ほら、もう耳が熱くなってるじゃないか」

指でぐしゃぐしゃと髪を掻き分けられ、耳朶を露出させられ、

「あ……ッ」

いだ。

「そこ……ッ、弱いんです……」

「嘘よッ! こんな……ッ、唇と耳しか触られてないのに、なんで、アソコまで熱くなってるの……!？」

昂る官能に身を震わせながら、いつしか腰をゆつくりとくねらせていた。

「（あん……ッ、腰も勝手に動いて……!）」

頭と身体がバラバラに乖離していく感覚に女捜査官は戦慄する。

「こんなの、ただのプリのはずなのに……ッ! 油断させるための演技なのに……はぁッ、私の身体、もう私の身体じゃないみたい……!」

これ以上続けられれば理性を保てないかもしれないというジリジリとした恐怖に、快樂へのほの暗い期待が滴を落とし、二つの感情は陰陽の如く絡み合いながら身体を蝕かす。

「いや、これは誘ってるだけだから……連絡が来るまで、コイツをこの部屋に留めるためだから……」

自分に無理強いするというよりは、もう、自分に言い訳をしている。

しかし、その違いすら曖昧になっただけで、

「（まだ大丈夫……私はまだ、正常な判断ができて……）」

ゆっくりと中腰になり、新人パーサーは男の隣へとにじり上がる。

「く……黒岩様……これですと私ばかりがキモチ良くなってしまう……まずは、一度こちらでご奉仕させてくださいませ……」

艶めく唇で甘く囁く。

「ほら、理緒のおまんこ……黒岩様の嬉しいオチンチンを頂きたくて、ヒクヒクしてるの、お分かりますか……?」

スカートをずり上げ、ショーツをずらしてパイプ



責めの痕跡を残す姫割れを見せ付けると、黒岩は少しだけ怪訝そうな表情になった。

「どうした？ 今日随分と欲しがりだな」

「そ、それは……黒岩様に抱いていただけけるのも本日が最後ですので、その……つい、はしたない真似を……」

（あ……今の、少しわざとらしくった……？）

しまったと思つて様子を窺うが、

「そうか……もう俺なしでは耐えられない身体になつてしまったようだな」

ニタァツと嗤つて、男はズボンを下ろす。理緒を疑っている様子は微塵も感じられない。

「もう金なんかいららないだろ？ チンポが欲しくて堪らないって目になつてるぞ……？」

「あ……はい……私、もう、ずつと身体が熱くて……どうしたら良いか分からなくて……ですから今日は一日黒岩様に……」

理緒はショーツを脚からするりと抜き取つた。ベッドの上でM字に脚を開き、左手を後ろに突いて右手で肉花弁を広げる。

「もうお金なんかありませんから……黒岩様の生オナホとして、はぁッ、心行くまでご奉仕させていただきますませ」

台詞に過ぎないはずなのに、一言ずつ言うたびに、乙女の子宮は熱を増す。

「どうか、黒岩様のお望みのプレイで……旅の最後の思い出を刻み付けて……」

他人の目の前で下半身を剥き出しにし、パイプで絶頂しながらも快感を得てしまったという強烈な経験に、理緒の心はズタズタに引き裂かれたはずだった。

だが、牝本能は一度味わってしまったその快感を、悦び、受け入れている。

一方で理性はその快感を否定し続け、恥辱と怒り

に満たされている。

（私は屈した訳じゃない……！ こんな男に、身体を変えられたなんてありえない！ だから……早く早く結果を知らせて……！ こんな真似、終わらせてよ……ッ！）

そう思っているのに、女捜査官は黒岩の表情を読み、先回りして身体を自ら開いている。

少しづつ膨らんできていた牝本能は、いつしか理性を圧倒するまでに育つていたのだつた。

だが、その事を理緒自身は知らない。

犯される事で依存度を深めていく、爛れた連鎖に堕ちていく自分の姿を見るチャンスは、もう永遠に失われようとしていた――。

突然、電子音が鳴つた。

「あッ、はぁッ、んあ……ッ」

ベッドの上で組み伏せられ、理緒は黒岩の男根に貫かれていた。

（検査結果、出たんだ……ッ！）

反射的に身を起こし、黒岩の上半身を押しやる格好になる。

「申し訳ありませんッ、チーフパーサーから呼び出しがッ、はぁッ、きて……」

電子音は、上着の内ポケットから規則正しく鳴っている。

「ハァッ、こんな時に何だ……ッ、いいからこのまま出ろ……ッ！」

理緒は迷わず通信機を取り出す。あと一分、いや、三十秒後には、この男と自分は立場が真逆になる。

それを考えれば、もう何の遠慮も必要なかった。

「はいッ、茨戸です……ッ！」

下半身を肉棒で穿たれたまま身を起こし、息を整える。

です……今お繋ぎしても大丈夫ですか？」

鵜飼の声は、やや緊張している。いつもの理緒ならここで一言でも昨夜のフオローをしたであろう。だが、理緒は急いでいた。そのまま「大丈夫です」とだけ応える。

「こちら科学捜査研究センターオホーツク方面出張所です」

淡々とした声が、雑音の向こうで検査結果を告げた。

「先ほど出た検査結果ですが……」

「……え？」

ダークアイアンの瞳が、大きく見開かれた。

（今の……聞き間違い……よね……？）

「……でしたので、念のためダブルチェックも行いましたが、やはり三名とも一致しませんでした」

「一致……しない……？」

虚ろな声で理緒は繰り返す。

（検査段階でサンプルが取り違えられた?! いや、そんなはずはありえない! ならどうして?! どういう事なの……?!）

血の気が引いていく音が、自分でも分かった。

「あ……そ、そんな……ッ、そんなはずはありません……ッ! だって、違うはずありません……ッ!」

自分でも何を言っているのか分からない。

まるで駄々をこねる子供のようになり、ただ繰り返す。

「今度こそ絶対に一致するはずなんです! だから、お願いしますッ、もう一度ッ、もう一度だけお願いします……ッ!」

必死に呼び掛ける理緒の手から、通信機が取り上げられる。

「……ッ!」

「俺の精液とあの時のサンプルは……絶対に一致しないんだからな」

「理緒は声も出せないまま黒岩を見上げる。  
（何を言ってるの……!? 一致しないって、何故そんなに自信たっぷり……いや、それよりも、そんな事よりも、何故この男が検査の話を知っているの……!?）」

この四日間、望まぬとはいえ多くの時間をかけて肌を合わせ、その身体の隅々まで知っていると思い込んでいた初老の男は、今の理緒の目には見知らぬ怪物のようにしか映っていない。

「何故俺が検査の事を知ってるか、って顔だな」  
怪物は理緒の鼻先に顔を近付けて満面の笑みを浮かべた。これまでに理緒が見てきた犯罪者達の笑顔のうちでも、最も醜怪な笑顔だった。

「まだバレてないつもりだったのかな、茨戸理緒捜査官……?」

「……知っていたの……!?」  
自分は途轍もなく大きなミスをしていたのだという結論に震えながら、女捜査官はやつとの思いで唇を開いた。

「ああ、本当に愉快な旅だったよ」  
黒岩は嗤い、理緒の腕を無造作に離す。

「……ッ!」

（コイツ、どこまで人を玩具にする気なの……ッ!）  
理緒は怒りに任せて渾身の力で腰を引き、男のペニス抜き取った。

「ハハッ、ここまで頑張ったのに残念だったな……」  
「黙って! そんな事より、どうしてDNAが一致しないのよ……!?」

気が付けば理緒は黒岩に掴みかかっていた。  
「だってあの事件の事を知ってるって事はッ、犯人は……!」

しかし、思いっきり揺さぶったつもりだったのに、

腕は簡単に跳ね除けられてしまう。

「……俺のDNAはキメラ型というやつでね。簡単に言えば、二つのDNAの型を持っているという訳だ」

「キメラ……型……?」  
聞き慣れない単語に、理緒は虚を突かれて鸚鵡返しするしかない。

「そうだ。普通は同一人物であれば精液も皮膚片もDNAの型が一致するんだが、俺の場合、どちらも自分のDNAなのに型がバラバラなんだよ」  
（型がバラバラ……? 確かに、あの時母の身体から採取されたサンプルは劣化が激しくて、使用できたのは爪の間に残った皮膚片のみだった……!）

「でも、それを知っているのは捜査関係者だけよ!?」  
「俺もその時は知らなかったさ……だが、あの事件からしばらくして別件の強姦容疑でパクられた時にDNA鑑定を受けさせられたんだが……無罪放免になった」

（ああ……そんな……コイツは、本当に……怪物だったんだ……）  
心底愉快そうな男の後ろに深淵が見える。膝に力が入らない。胸の悪くなる種明かしを聞かされ続けるしかなかった。

「その時に初めて分かったんだよ……精液同士、皮膚片同士の鑑定でなければ俺のDNAは絶対に一致する事はないってな。まあ、そもそもお前の母ちゃんも俺以外のザーメンも浴びてぐちゃぐちゃだったからな、あれは幸運だったよ」

「でも……ッ、他の、あの三人も犯行現場にいたのなら、どうして誰のサンプルとも一致しなかったの……!?」

残る大きな疑問に答えたのは、蛭間の声だった。  
「あははッ、美味しかったでしょ子供のザーメン？」

自分から搾りに行ってくれて助かったよ、さすがに俺が男の子から直接もらう訳にはいかないからさ」  
振り向くと、蛭間がいた。いや、蛭間だけではない。九鬼も小暮も、ベッドのすぐ横に来ていたのに、全く気が付いていなかった。

「あ、あとついでにコイツらの分も、気絶してる間に入れ替えさせてもらったからね……ダメだよ、いくら大事だからって、ポケットなんか肌身離さず持つてたらさ、すぐ分かっちゃうよ?」  
蛭間の得意げな顔を見ながら、全身から力が抜けるのが分かった。

（ああ……そんな……それじゃ、私がサンプルとして送ったと思っていたのは、三人分ともあのコ達の精液だったのね……）  
理緒は全てを理解した。

（黒岩だけじゃない! コイツらまで一緒になってお母さんをレイプしたんだ……!）  
なのに、サンプルを子供達の精液とすり替えて、過去の犯歴からも足がつかないように工作した……!

「しかし、今回は蛭間のおかげで助かったよ」  
言葉もないまま座り込んでいる女捜査官を、犯罪者達は和気藹々といった様子で取り囲んだ。  
「最初の顔合わせの時からこの女、怪しいとは思ってたんですよ……オヤジさんの好みにあまりにドンピシャ過ぎてね」

褒められて得意になったのか、蛭間は饒舌だ。  
「ほら、オヤジさんがやりたいって言う女ってなんか共通点があるじゃないですか……それで渡嶋のデータにアクセスして調べてみたら、まさかあの小さかった理緒ちゃんだったとはねえ……」

（そう、コイツが、この蛭間に気が付いて、その目的まで察知して私を畏に嵌めたんだ……お母さんを辱めて、私までも……ッ!）

新連載!

魔を打ち破る麗しき聖女の輪舞!

うわあああ  
に逃げる!  
逃げるんだ!

ど…どうして  
こんな所に  
奴らが…!

喚け!

喚け!

久方ぶりに  
食らう人間の絶望は  
たまらぬわ!

泣け!

雌の肉も  
実に美味だ

クン!  
もうこの街は  
おしまいだあ!





あがあああ…  
あ…ああ

なんだもう  
壊れたのか？

なかに賢は  
まだ残らでも  
おるわ

ふん  
やっぱり…

お前たち悪魔は  
最悪だわ



ほれ  
そこにも

……主よ  
願わくば  
哀れな子羊に  
救いの手を



クフフフ  
シスターか

聖人氣取りの  
神の犬を墮落  
させてやるのは  
古よりの  
最高の愉悅よ！

ミルフィーユから大好評発売中！  
粘液まみれの快樂地獄ゲームを  
原画担当の楠木りん自ら執筆！



# 粘獄のリーゼ

淫罪の宿命

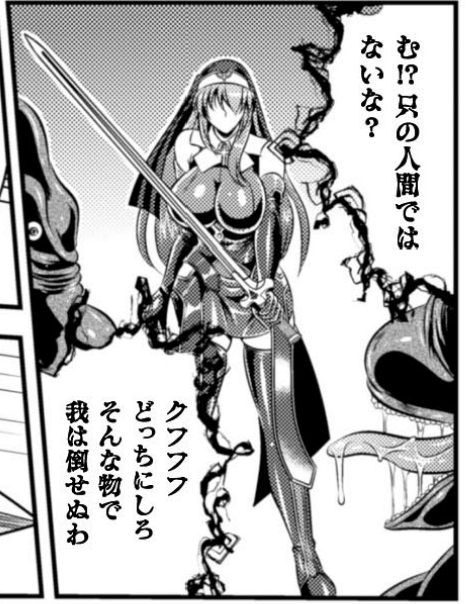
第1話 イバラの姉妹

漫画 COMIC 楠木りん 原作 電胆



人間を  
戮り殺し：

女と見れば  
犯すことしか  
考えない



む!? 只の人間では  
ないな？

クフフフ  
どっちにしろ  
そんな物で  
我は倒せぬわ



お前たち  
悪魔は：

イバラの姉妹が一人  
このりーぜ。  
ヘルデブランドが！



神の許しさえなく  
魂ごと断罪して  
あげるわ！

!?

馬鹿な!?



ああ主よ  
お許し  
ください

大いなる  
魔の眷属である  
我らを一撃で…



肉体だけでなく  
魂ごと消滅させた  
だと!?

今宵も  
犯してしまった  
殺戮という  
名の罪を…



な…  
舐めるなよ  
小娘エ!  
たかが人間の  
分際で調子に  
乗りおつてエ!

殺してやる…!!

身も心も  
バラバラに  
切り裂いて

魂まで  
汚辱し尽く  
してやる!!



本当…  
救いようがない  
連中ね



吠えろ！  
咎人の劍！！

罪への  
裁きすら不要：  
魂までを  
喰らい殺せ！！





鎧の力で女体化してしまった青年騎士！

国のためその身体に精を受け入れる！！

# 鎧の始まりの

美少女騎士になった騎士団長

小説 NOVEL / **うえだ 上田ながの**  
挿絵 ILLUSTRATION / **こいかわ 恋河ミノル**



「終わりだ！ 魔術師ラグーン！ 貴様の野望はここでっ！」

バースド王国聖騎士団団長スレイムガンフォードは王国郊外の洞窟内部にて一人の魔術師を斬った。この世界を滅ぼす力を持った強大な悪魔を召喚しようとした魔術師を……。

「あつぐ……があああああ！」

魔術師は苦痛の悲鳴を漏らす。

「悪いな。貴様に対しては斬り捨て許可が下りている。悪魔召喚とはそれだけの罪だ。だから……安らかに眠れ」慈悲はない。スレイムは魔術師の身体を袈裟懸けに斬った。

(……終わった)

敵を斬り裂いた剣を振るう。刃にこびりついた血潮が飛び散った。刃にこ

「く……く……く……くは……くは……くは……ははっ！」

だが、魔術師は笑う。肩から腰にかけて刃で斬られた状態で、歡喜の笑みを漏らした。

「なんだ!？」

どうして笑う? 何故笑える?

「これだ……この瞬間を待っていた! 強大な悪魔……それを召喚するために、生け贄が必要なんだよ。それも……ただの生け贄じゃない。術者自身という生け贄がああ！」

苦しもうではある。けれど、喜びのためだろうか? 魔術師は饒舌だった。

「しかも、自害では駄目だ。他者に殺される。つまり、少なからぬ敵意を浴びてという状況でなあ」

「敵意を浴びて? あ……まさか……」スレイムが騎士団の仲間達と共にこの場に来たのは、匿名のたれ込みがあったからだ。魔術師ラグーンがここで悪魔を召喚しようとしているという情報が入ったから……。

「まさか……あの情報は貴様が……」

最初からすべて計算されていた?

「そういうことだ……く……く……く……くははは! これ……終わりだ! 世界……終わりだあああ!」

断末魔の絶叫を響かせる。

刹那、洞窟の地面に魔法陣が描かれ、輝きを放った。

そして……

「う、うあ……うあああああ!」すべてが闇に包まれた。

\*

身体中が痛い。それに、重い。

全身に気怠さを感じながら、スレイムは目を覚ます。

「……ここは?」

開いた瞳に映ったのは白い天井だった。魔術師を斬った場とは違う、建物の中のように見える。

「目が覚めたかスレイム」

声がかげられた。

「え? あ……オズマ……」

視線を向けるとそこには聖騎士団の副団長であるオズマの姿があった。

「えつと……何が起きて? うつく」

戸惑いつつ身を起そうとする、痛みが走った。身体にかなりのダメージを受けてしまっているらしい。

「治療魔法はかけてあるが完全じゃない。無茶はするな」

「そ……そうか……だが、何が?」

「ここは城だよ。城の医務室だ」

そう前置きしたうえで、オズマは事態を説明してくれた。

「ラグーンをお前が斬った後、悪魔が出現したんだよ。悪魔は魔法陣から現れた際、強烈な瘴気を放った。お前は至近でそれを受けて気を失ったんだ」

「……なるほど。で、悪魔は?」

「洞窟にいる。行動はしていない。だが、放置はできない。アレは不味い」

悪魔が出現し、スレイムが気を失った後、残った団員で悪魔を倒そうとしたらしい。だが、出現した悪魔には近づくことすらできなかつた——とオズマは教えてくれた。

「並の人間では近づくだけで意識を失う。結果、我々はなにもすることができず、撤退してきたというわけだ」

「……そうか……。だが、悪魔はそれを追ってこなかつたのか? まだ洞窟にいます?」

「ラグーンはこの世界を滅ぼすために悪魔を呼び出した。なのに洞窟に留まっているというのがよく分からない。」

「その点は私が説明しよう」

すると、一人のちびつ子が医務室に入ってきた。身長はスレイムの半分ほどしかない。そんな身体にぶかぶかのローブを身に着けた少女だ。

「いや、少女というのは正しくない。

何故ならば、実年齢は数百才を超えているからだ。

名はフェイタン・レウラレル。バースド王国至宝の大魔術師である。

「ラグーンが呼び出した悪魔——デウスブルグスは強大な力を持つている。それこそ、この世界を滅ぼせるほどのな。だが、それだけの力を発揮するには時間がかかるのだ」

フェイタンの話によると悪魔はまだ全力を出せるほどの魔力を蓄えてはいないらしい。

「奴は現在この世界に漂う瘴気を集めている。全力を出すためにな」

「……動き出すまではまだ時間がかかるというのですか?」

「そういうことだ。つまり、倒すならば今しかない。逆に言えば……」

動き出す前に倒せなければすべてが終わる——フェイタンは言外にそう告げてきた。

「なら、すぐに倒さねえと」

ふらつきながらも立ち上がる。足下がおぼつかないためか、オズマが肩を支えてくれた。

「倒す? 無理だ。瘴気が強すぎるせいで、近づくことさえできないんだぞ。第一、普通の武器など通用しない」

「だったらどうしろって言うんですか? まさか、諦めると?」

フェイタンを睨む。

「いいや、そうじゃない。手はある。そう、方法は考えてあるんだ。だから短慮を起こすな」

「方法？ どうするんです？」

「原初の鎧を使う」

首を傾げるスレイに対し、フェイタンは簡潔にそう答えを返してきた。

\*

原初の鎧——バースド王国に代々伝わる魔法の鎧だ。身に着けたものは人を超え、神にも等しい力を得ることができるといふ。

「その原初の鎧がここに？ 噂では聞いたことがあったけど、マジに存在してたのか。ただの昔話だと思ってたぞ」  
王城の一角に存在する聖堂に、スレイはオズマ、フェイタンと共にやってきた。

「……伝説には根拠があるものだ」

フェイタンは薄笑いを浮かべつつ、スレイが聞いたこともないような言語——呪文を口にした。

すると聖堂中心に置かれた石像が輝きを放ち、中心から二つに割れる。そして、その鎧が姿を現した。

「……これが……原初の鎧……」

割れた像の中は石棺のようになっていた。そこに置かれた鎧。ゴツゴツとした巨大な小手と、すね当てが視界に映る。それと折りたたまれた布のようなものが……

「硬そうだな。このごつさ……すげえオレ好みだ。これはかなり強そうだし、やはり鎧というのはゴツゴツしていなければならない。デカくなければならぬ。流石は言い伝えに残る伝説の鎧というべきか……」

「いや、待て……。ちよつと変だぞ」

が、オズマが首を傾げた。

「何がだ？」

「何が……確かに小手やすね当てはごつい。強そうだ。だが、胸当てがない。腰当てだつて……」

「そういえば……」

プレートらしきものが見当たらない。それどころか、兜すら存在していないかつた。

「なんだ？ これ……手足だけに着ける鎧なのか？」

つまり胸当てや腰当ては自前で用意しろということなのか？

「違う。ほら、よく見る」

するとフェイタンが鎧を指差した。

例の折りたたまれた布のようなものを。

「これが？」

ちよつと不安を覚えたつ、その布を手に取り、広げてみた。

「なんか女の下着みたいだな。いや、下着というにはなんか手触りが……」

防水性に優れているような感じだ。異国の……水着？ しかも……えつと……確かピキニとかいわれているものに似てる気がするぞ」

胸と腰を隠す僅かな布。青と白の縞々模様が実に印象的だ。しかし、何故こんなものが鎧と一緒に封じられていたのか？ 一瞬理由を考え……

「……ま、まさか……」

「この水着みたいなのも、鎧の一部なのか？」

「そういうことだ」

あつさりフェイタンは頷いた。

「そういうことつて……嘘ですよね？」

これじゃあ原初の鎧っていうか……ピキニアマービーじゃないですか!!」

「その通りだが……何か？」

フェイタンは涼しい顔で首を傾げる。「何か？ じゃないですよ！ こんな誰が着るんですか?! オレ達の騎士団は男しかいないんですよ! つて、まさか……フェイタンが？」

ジツと大魔術師を見つめる。

「いや、私が着ても意味がない」  
が、あつさり否定されてしまった。

「意味がない？ それつてどういうことですか？」

「原初の鎧は装着者の対魔力と能力——それも身体能力を限界以上に引き上げる力を持つている。いいか、身体能力という点が大事だ。つまり、装着者自身の身体能力が低ければ意味がないんだ」

だから身体能力に劣るフェイタンが着ても強い力は発揮できないらしい。「なるほど……いや、でも、じゃあ誰が着るんです？」

「……お前しかなからう」

真つ直ぐスレイを見つめてきた。「は？ はあ？ い、いや……いやいやいや、オレは男ですよ。こんなピキニ着れるわけ……」

「この国の為だぞ」

「いや、しかし……」  
思わず縋るようにオズマを見る。

「……フェイタン様の話によれば、例の悪魔の力は尋常なものではないらしい。それほどの敵に対抗するためには、通常状態でも尋常でない力を持つていなければならない駄目ということだ……」

つまり、他の誰も及ばないほどの力を持った騎士でなければ……この意味、分かるな？」

はつきり口にはしない。

が、オズマが言いたいことは簡単に理解することができた。

国で一番の騎士。諸国にまで名を馳せるほどの力を持った騎士。即ちスレイ。お前が身に着けるんだ——と、オズマは言いたいらしい。

「国の為だ」

二人が同時に見つめてくる。

「う……分かった。分かったよ。着ればいいんだら着れば! だが、お前ら後悔することになるぞ。男のピキニ姿なんて見るハメになるんだからな!」

「……さて、それは如何かな？」  
フェイタンは不気味に笑った。

その笑みに怪しいものを感じつつ、スレイは身に着けていた騎士服を躊躇いつつも脱ぎ捨てると(国の為! 国の為だ!)と何度も心の中で自分自身に言い聞かせつつ、鎧——とは名ばかりのピキニを身に着けた。

男の胸板に女性用の胸当ては実に虚しい。スカスカだ。それに、腰当てだつてゴム部分が限界近くまで伸びてしまつている。もしかして戦いの前に切

「……フェイタン様の話によれば、例の悪魔の力は尋常なものではないらしい。それほどの敵に対抗するためには、通常状態でも尋常でない力を持つていなければならない駄目ということだ……」

れてしまうのではないかとさえ思えるほどに……。

「ホントにこれでいいのか？ つてか……情けない……」

あまりに恥ずかしすぎる。羞恥で顔が真っ赤に染まっていくのが自分でも分かった。

が、恥ずかしがっていられたのは一瞬だけでしかない。

「な、なんだ？」

変化は唐突だった。

いきなり、スレイの身体が輝き始める。強烈な閃光。凄まじい光が聖堂一帯を包み込んだ。

「ま、まぶしっ!!」

光で視界が遮られる。

（一体何が起きて？）

同時に強烈な力の奔流が全身に流れ込んでくるのが分かった。

（これ……力だ。力を感じる。マジだ……原初の鎧……これ……本物だ）

光の中でそんな確信を抱いた。

そして、閃光が収束する。眩んでいた視界が戻ってきた。

「凄……これが伝説の鎧……」

呆然と呟きつつ、視線を下へと落とす。あまり見たくないが、鎧を身に着けた自分の姿を確認するために……。

「……え？」

はないはずの胸が……。

しかも、結構大きい。ピキニからはみ出してしまいそうなほどにたわわな胸だ。ツンとしたちよつと上向きの乳房。間違ひなく掌には収まりきらないだろう。谷間も見つめてみると吸い込まれそうな気分になるほど深い。

いや、変化は胸だけじゃない。

乳房のせいでよく分からないが、間違ひなく腰もキュッとくびれていた。鎧を身に着ける前よりも明らかに細く存在している。ちよつと安心だ。

（いや、安心していいのか？ つて、太股も……なんか……）

鎧装着前よりもムチツとして太くなっている。そのうえ、尻にもプリッとした張りが……。

反射的に作り物ではないかと思いついた張りが……。

自分の胸を揉んでみる。

（柔らかい……。なんか……掌に肌が吸いついてくるような感じだ。しつとりしてるというか、瑞々しいっていうか……。こんな感触初めてだ。男の身体と全然違うぞ。ああ、これ、間違ひなく本物だ）

変化はそれだけに留まらない。

髪も伸びていた。肩の辺りまでしかなかった銀色の髪が、背中の中程まで届くほど長くなっている。

（これって……オレ……）

「お、女？ 女になつてるう!」

聖堂中に響くような大声を上げた。明らかに甲高くなっている声を……。

「……そういうことだ」

これに対し、普段と変わらぬ様子でフェイタンは口にする。どんな変化が起きるのか理解していたらしく、表情も口調も冷静そのものだ。隣のオズマが口をあんぐり開けているのとは実に対照的である。

「そういうことつて……どういうことだよ!」

思わず敬語を使うことも忘れた。

「原初の鎧はすべての始まりとも呼ばれる魔導具の一種だ。始まり——つまり、命の始まりである女の身体に変わることは必然なんだよ」

「……必然つて……そんな当たり前のようにいわれても……。つてか、こんな姿恥ずかしすぎる!」

反射的に鎧を脱ごうとする。

「いや、待てつ!」

が、オズマに止められてしまった。

「な、なんだよ？」

「なんだよじゃない。脱ぐのはまだ早計だぞ。力を確かめてみないと」

「それは……確かに……」

その通りだ。勢いで鎧を脱いでしまつたら、なんのためにこんな姿になつたのが分からない。

というワケで、一旦聖堂の外に出て、力を測ってみることにした。

「ほら、城壁を殴ってみろ」

フェイタンが指示を出してくる。

「こ……こうか？」

いわれるがままに城壁に対して拳を突き出してみた。

瞬間、城壁の殴った部分が粉々に碎ける。凄まじい爆音と共に……。

「ま……マジか？ 信じられない？」

ほとんどの力など入れていない。だどいうのに信じられない力だった。

「女の身体は命を生み出すほどの力を持つている。原初の鎧はその力を物質的破壊エネルギーに変換する能力を持つているんだ。それだけの力があれば、悪魔にも必ず勝てる」

「……確かに」

見た目は恥ずかしすぎるが、この力があればどんな敵にも負けはしない——という自信を持つことができた。

「あ、あれ？」

だが、異変が起きる。

「どうした？」

オズマが首を傾げた。

「いや……なんか……力が抜けて……」

身体中から力が抜けていく。立つているのも辛いくらいである。

「……ふむ、想定以上に燃費は悪いようだな。今の一撃ですべての力を使いきつてしまったようだ」

フェイタンが状況を説明してくれた。

「い、一回壁を殴つただけだぞ？」

「……だが、人を遙かに超える力だつた。消耗は当然だ」

「そんな……それじゃあ実戦になんか使えないぞ……」

給すればいいんだ」

「補給？ どうやって？」

「簡単なことだ。精液を身体に取り込めばいい」

「……は？」

一瞬間が真つ白になる。言葉の意味が理解できなかった。

「今、なんて？」

オズマも恐る恐る問い返す。

何かの聞き間違いだろうか？

「だから精液を身体に取り込めばいい」といった。つまり、男に抱かれて膣中出しされるか、もしくは精飲をすればいいということだ」

聞き間違いではなかった。

「どどど、どうということだよ？」

「女は命を作り出す力を持っている

だが、一人では作れない。男がいてこそその能力だ。だから……精液が必要なんだよ」

フェイタンは実に楽しそうに笑った。

「……」

（オレは男で騎士だぞ。そのオレが男に抱かれる？ あり得ない。絶対無理だ……そんなことできるはずがない）

その後、少し考える時間が欲しいと断り、スレイは自室へと戻ってきた。

その自室にて、ひたすら苦悩する。フェイタンの言葉に従うべきか否かということを……。

因みに、鎧は身に着けたままであり、姿も女のままである。

その理由は鎧を脱ぐことができなかったからだ。

フェイタン曰く――。

「最初の鎧は装着時に、装着者が考える鎧を身に着ける目的を完遂する。その後脱ぐことはできない。まあ、ピキニ部分をずらす程度のことはできるがな」ということらしい。

つまり、悪魔を倒すまではこのままということだ。

（こんな姿……）

部屋に置かれた鏡の前に立つ。

手足はごつい。まさに鎧だ。が、身体は水着を身に着けているようにしか見えない。見る人が見れば馬鹿にしているのかと怒り出しそうなほどだ。

（これが本当にオレかよ……）

信じられない。

どこからどう見ても女だ。

胸は大きいし、太股はムチムチしている。腰はくびれているし、尻は大き

い。それに顔立ちも男だった時よりどこか柔らかくなっている。それでいて凛とした佇まいとでもいうべきか。

キリッとした切れ長の瞳に、真つ直ぐ通った鼻梁。艶やかな唇。自分でも見惚れるほどに美人である。

長い髪が邪魔だったので後頭部で結つたためだろうか？ 水着みたいな鎧だということを見れば、どこからどう見てもカッコイイ女騎士といった佇まいだった。

（……なんか……凄くオレ好きな感じだよな。自分なのに……）

そんなことまで考えてしまう。

だからだろうか？ ほとんど無意識

のうちに、再び自分の乳房に手を伸ばしてしまっていた。

ムニユツと触れる。

「んっ」

その瞬間、ただ触っただけでしかないというのに、一瞬身体が痺れるような感覚を覚えた。

「わっ!!」

慌てて手を離す。

「な、なんだ今の感覚？ それに今のオレの声……す、凄く……その……え、エロくなかったか？」

妄想で自慰をする時に頭の中で想像するエッチな声そのもの――という気がした。

（女の身体って……やっぱり男より敏感なのか？）

ついついそのようなことを考えてしまう。

だからだろうか？ 女の快感とはどんなものなのだろうか？ という好奇心がわき上がってきてしまう。

それに、見てみたいとも思ってしまった。こんなに美人な女騎士が悶える姿を……。

（だつて仕方ないだろ……オレ……童貞なんだから!）

部下達の前では男らしく見せるため「女遊び？ し尽くして飽きてくるくらいだぜ」とか「今日も女を抱いてくるか」とか無駄に強がっているもの、実は全然女慣れしていないのである。貴族の家に生まれ、女子に対しては紳士であれと教え込まされてきたせい

か、どうしても女性に対して一歩引いてしまうところがあつた。その結果、未だにスレイは童貞だった。しかも、国最高の騎士であり、騎士団長という立場ではあるが、本来ならばまだ学校に通っていてもおかしくない年齢でもある。はつきりいつて女の身体に一番興味がある時期である。

だからこそ、思ってしまった。見てみたいと……。例え自分の身体であつても女の肢体を観察してみたいと……。（この身体はオレのものだ。オレ自身なんだ。つまり……誰も傷つかない。だから……）

手を出したつて問題はない。（す……少しだけなら……）

自分の部屋だ。誰かに見られるわけではない。

けれど、キョロキョロと一旦周囲を見回した後、ゴクツと息を呑むと、スレイは改めて自分の乳房に触れた。いや、ただ触れるだけじゃない。もにゅつと揉んでみる。

「あんっ」

瞬間、先ほど以上に甘い感覚を覚え、反射的に声を漏らした。

（なんだこれ？ ぜ、全然違うぞ。男の感覚と全然違う。これが……女……）

自慰の際、ペニスを握つた時に感じる快感とは全然違う。触れただけだというのに、一瞬意識が飛びそうになるほどの刺激だった。頭がふわふわする

というか、身体が浮かび上がるようなそんな感覚……。



なぜだ!?  
なぜお前が  
生きている!?

クソッ!

クソッ!  
この力は

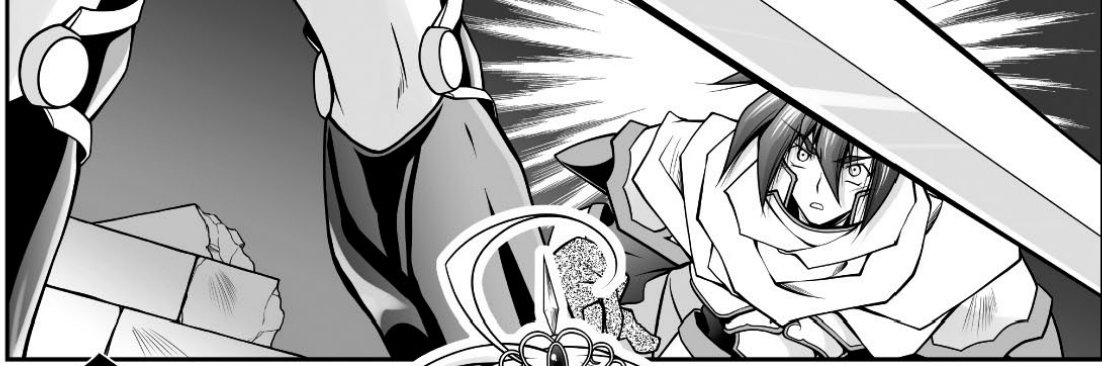
魔王との  
最終決戦!

私の力:  
神のご加護が  
ある限り  
誰も死なせは  
しません!

チイッ  
何という  
精神力か

とどろ  
くことは  
まさか!?

貴方などに  
支配される...  
私では...  
な...い...



エルファシア  
姫!!

魔王…に  
刃向かう  
愚か者よ

ハハハハ!  
お前にコイツが  
倒せるか?

許さ…  
な…い…

剣闘姫 エルフアシア  
~聖と魔の狭間で~  
漫画 ぱふえ  
COMIC



くそっ!  
姫に剣は向け  
られない!!

待て!  
エル!!



往生際が  
悪いですよ

観念なさい  
魔王！



司祭に  
預けていたが

やはり！  
お前もか



はい！

勇者殿は  
魔王を！！

エルファシアは  
任せて！



恥辱に耐えて  
きたのも  
反撃の  
好機を待って  
いたためよ！！



お…母様  
……？

正気に戻り  
ましたね…

さあ皆で  
魔王を倒し  
ましょう

おのれ!!  
人間ごとき!

何度も何度も  
何度も何度も

私たちの力を  
勇者様に

何度蘇ろう  
とも!  
お前の野望は  
打ち砕く!!

勝利を  
信じて!



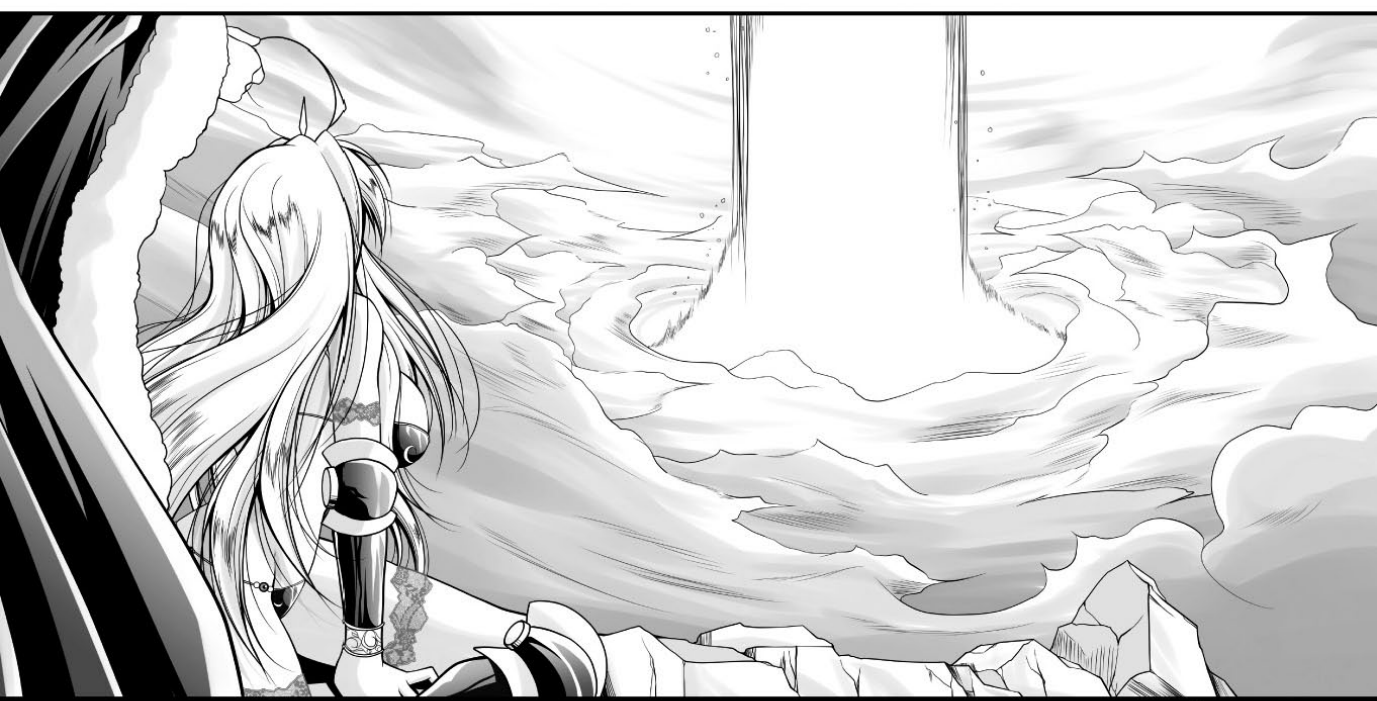
魔王!  
覚悟才才!!





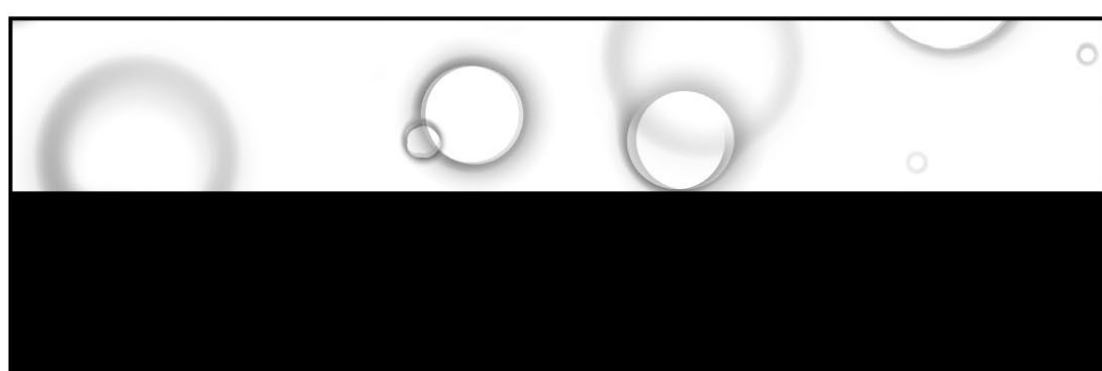
オレト...

ク...ン  
終ワラ  
ヌゾ...



何度デモ  
.....

オマエガ...  
イル限り



国民を守るエルフの騎士  
リリアーナが  
変態人妻になるまで

レディナイト  
リリアーナ

悦虐に墮ちる甲冑ビキニ

小説  
NOVEL

あら い ゆう  
新居佑

挿絵  
ILLUSTRATION

み つ ぼ みのる  
三ツ葉稔

## 【シーン1】

中央大陸の西端に位置する小国・ラグエヌス公国は、人口や領土こそ周辺の大国と比べものにならないが、勤勉で穏やかな国民性と肥沃の大地。そしてなにより、有益な航路を持ち、各国の交易の要所に位置することから、経済的にも非常に豊かな国である。

しかしそれは、野心溢れる隣国の侵略の対象となりえることも意味していた。

「げははっつ、泣けっ！ 喚けっ！  
そして死ぬえっつ！」

「ぐああっ！」「うごおっつ！」「む  
無念……っ！」

季節が厳しい冬を迎えた頃、突如としてオークの大軍が、ラグエヌス公国の領内に大挙して押し寄せてきた。

南方で生まれた異形の怪物たちは、人間を含む、いくつもの他種族の国を滅ぼし、領土を広げ、ついにその野望の魔の手を、この小さな公国にまで伸ばしてきたのだ。

「ぎやははっ、人間のミンチはいつ見ても気分が躍るぜ！」

「ぐっ、おの……これ、化け物どもめ……っ。ぐはああっ！」

鍛えた鋼の剣の一撃を受けつけないほどの、屈強な緑色の地肌をもつオークたちの前では、選りすぐりの公国守備隊の騎士たちも無力だ。

オークたちが振るう原始的な斧や棍

棒の一撃の前に、次々とグロテスクな肉塊へと変わっていく。

「街はもうすぐだっ。食料や金だけじゃねえ。人間の牝どもを犯し放題だぜっ！」

「はははっ、今からでもチンポが滾つてたまんね——がっ、ぐああああああっつ！」

下卑た薄ら笑いを浮かべていた一匹のオークが、丸太のように太い首筋から、毒々しい青色の血しぶきをあげながら、地面に倒れ伏した。

その芸術的で鮮やかな切り口を怪物に刻んだ麗しき女騎士が、まさに救世の女神のごとく颯爽と戦場に舞い降りる。

「遅れてすまない。ここは私たちに任せて、後方に下がれ！」

すらっとした高身長に、麗しいプロンドを縦ロールにした出で立ち。遠目からでも気を惹く美顔には、勇ましい碧眼と、彼女の種族であるエルフの特徴の横に鋭く長い耳。

うら若い豊かな女体を包むのは、凝った装飾が目につく銀色のピキニアーマーだ。露出こそ多いが、強力な魔法の加護を受けた銀鎧は、並大抵の攻撃をはじき返すと同時に、持ち主がそれぞれを着こなすに相応しい相応な剣と魔法の使い手であることを示している。

「そうだよ。後はリアーナ、それに僕たちが引き受けるからね！」

「リアーナ騎士団長。それにユリアン公子までっ！ あ、ありがとうござ

います。どうかご無事で」

「ああ、この国の平和を、あんな豚どもに穢されてなるものかっ！」

札を言つて撤退する騎士たちを見送つたリアーナは、視線の先に立つオークたちを、キリッと睨み付ける。

「ぐふふ、ようやくお出ましか。その顔、その耳。なによりその高慢な口の聞き方。エルフ族の生き残りにして、最強の魔法騎士の呼び声高い、リアーナあつ！」

そう問うてきたのは、通常のオークより、さらに一回り大きい……身長三メートル。体重はゆうに二百キロ以上はあるうかという、オークの王。オークキング・オルガスだ。

「くっ、十年前、我らエルフ族に和平を申し込むフリをして、一族を皆殺しにした。貴様の所業は忘れんぞ、オルガスっつ！」

自らの身長ほどもある大剣をズラツ！ と抜き放ち、怒れる切っ先をオークキングに向けるリアーナ。

高い魔力と華麗な剣技をもつとされるエルフの中でも、当代一と謳われたリアーナは、その凄惨な虐殺の場にはいなかった。ずる賢いオルガスが命じた陽動に、口惜しくも引つかかってしまったのだ。

帰る場所を失つたリアーナは、その後、ラグエヌス公国に流れつき、そこでその剣と魔法の実力、なによりその気高さと忠誠心を買われ、公国の騎士団長に抜擢された。

そして小国であるラグエヌス公国を、その圧倒的な実力とカリスマ性をもって、幾度も外敵から守り抜いてきた。

また誇り高く、やや他種族を見下す傾向のあるエルフ族でありながら、身分の分け隔てなく、優しさと凛々しさを振りまくリアーナは、国民たちからの信頼も厚く、『救国のエルフ騎士』と、国民みなから慕われている。

（一族の恨み、一時たりとも忘れたことではないっ！ 公国を私たちエルフの国のようにさせるわけにはいかない。そう、ユリアンを悲しませるわけには……っつ！）

横に立つ、まだ幼さの残る少年をチラリと見やる。

人の数倍長寿であり、その分、年の取り方も緩やかなエルフだ。ラグエヌス公国第一公子であるユリアンは、彼が今よりさらに小さいときから、知っている。

穏やかで優しく、思いやりがあるユリアンは、異種族であるリアーナを一番初めに受け入れてくれた人物だ。今の地位を得たきっかけ、そして他種族に対する思いやりは、彼の影響が大きい。

しかし成長した少年は、家臣であるリアーナに対し、強い、一途な想いをも抱いてくれていたのだ。そしてそれは麗しいエルフ騎士も同様だった。

「リアーナ、いくらキミが強いからって無茶はしちゃだめだよ。僕はキミを失いたくない。一緒にこの国を守つ

て

ていこうっ」

リリアーナ直伝ということもあり、ユリアンの剣の腕はなかなかだが、いかにせんまだ経験が足りない。しかし、いざとなれば、将来国を背負う若者らしい、強い気概を見せてくれる。

「一族を殺されたばかりの私は、オークたちへの恨みにばかり、心囚われていた。しかし、今の私はただの復讐者ではない。この胸に生まれた熱い思い……ユリアンが愛するこの国を、私は必ず守り抜いてみせる！」

そう強く誓い、金髪のエルフ騎士はその剣に強い魔力を纏わせ、醜い侵略者たちに正義の剣閃を振りかざす。

「はああああっ！ くらえオークどもっ！ 秘剣、アブソリュート・チェインっ！」

グッと低い姿勢で、百体以上のオークに向かって突進したリリアーナは、魔法で自身の身体能力を大幅に底上げすると、幾重もの残像を残す、目にも止まらぬ剣さばきで、オークたちを群れごとまとめて斬り裂いていく。

「リリアーナに続けっ！ この国からオークたちを追いつすんだっ！」

戦っているのはリリアーナだけでは、ない。ユリアンが指揮する騎士たちも、リリアーナには及ばないものの、高い練度のチームワークをもって、異形の化け物たちを屠っていく。

何十という怪物の断末魔の音が響き、緑色の死骸の山が瞬く間に出来上がる。劣勢だった公国騎士団は、リリアー

ナが到着したことで、完全に勢いを取り戻していた。

「ふんっ、やはり卑怯な手を使わなければ、オークなどこの程度。エルフである私に勝てるはずもない。覚悟してもらおうぞっ、オルガスっ！」

ブンっとう剣を振って、刃についた毒々しい青い血を払うと、いまだに椅子に座って、余裕たっぷりに構えるオークキングに、鋭い視線をたたきつける。

「くくくっ、やはりエルフ族最強といわれただけはあるな。強さだけでなく、その生意気な口も、身体のほうがも上等だ。さぞ立派な牝奴隷になるだろうなあ」

追い詰められているのに、オルガスは舌なめずりをしながら、ピキニアマーに包まれたリリアーナのセクシーな女体を、いやらしい目つきで見つめた。

「リリアーナをそんな目で見るな、化け物めっ！ リリアーナはみんなから尊敬される騎士団長だ。それ以上言うと、僕がお前を許さないぞっ！」

「ユリアン……っ。ふっ、自分の死期すらわからぬ下等生物め。今こそ、我が一族の恨み、晴らさせてもらうぞっ！」

愛する人の確かな想いを感じ、胸が熱く高揚し、強い幸福感に包まれる。心と心の繋がりを無視し、ただ性欲だけに生きるオークには絶対にわからない、女の幸せだろう。

「冥府へ墮ちろっ、オルガスっ！」

リリアーナは、纏った銀色のピキニアマーを、強い魔力でコーティングすると、雷撃のごとき速さと強さをもって、巨大なオーク……その首元に必殺の大剣を突き立てる。

ギィインツッ！

「なっ、なん、だど……っ!?」

見事な切り口で、オルガスの首が胴体から離れる未来を確信していたリリアーナが、驚愕し、瞳を大きく見開かせる。

斬撃が首元に届く寸前、不可視の防壁が発動し、エルフ騎士団長の一閃を、無理やり弾き飛ばしたのだ。

「ぐははっ、誰が冥府にだど!? 俺様がエルフごときにやられるわけがないだろう？」

無傷でそう笑うオルガスの右手、その中指には、不気味に輝く紫色の寶石をつけた、一個の指輪がはめられている。

「あ、あれはもしかしてリリアーナの前に言っていた……」

「禁忌の指輪……っ。貴様、オルガスっ！ エルフの国を滅ぼしたときに、奪ったのか……っ！」

「ようやくマスターしたぜ。エルフでさえ恐れた呪法の数々を得た、俺様は無敵よっ！ こんな小国、世界征服にはどうでもいいが、リリアーナ。美しく強いお前だけは、俺様のモノにしなくてはな。くっく、どうやらそのガキに惚れているようだが、それも今

日までだ。そのエロい身体も、お高くとまった心のすべてを、俺様のチンポに跪かせてやぜっ！」

ドゴオツッ！ とオルガスが握った棍棒が、リリアーナに向けて振り下ろされる。なんとか躲したリリアーナだが、そこからさらに不気味な黒い魔法陣が扇状に広がり、後方にいた、魔法耐性の薄い騎士たちを、暗黒の衝撃波がなぎ倒していく。

「くっ、本当に禁呪を我が物に……っ」

「リリアーナ、下がって。奴の狙いはキミだ。僕はキミを渡すわけにはいかないんだっ！」

言ったユリアンが、リリアーナを飛ばすように、前へ出る。

だが、高位種族であるエルフの力……しかも悪しき禁忌の呪法を得たオークの力は未知数だ。もしかしたら、本当に勝ち目がないほどの……。

（どうする、どうすればいい……っ）

ユリアンの気持ちはたまらなくうれ

しいが、ここでオルガスを食い止めなければ、国そのもの、なによりユリアンの命を危険に晒してしまう。

しかし、無策で相手をできるほど、今の奴は生易しくはない。

「私は……っ」

「ユリアンを逃がし、リリアーナがオルガスと対峙する」→シーン2 P113へ

「ユリアンを信じ、後方下がって、作戦を練る」→シーン3 P115へ

## 【シーン2】

「くくっ、兵を逃がし、騎士団長自らしんがりを務めるか。いいぞ、それでこそ俺様の伴侶に相応しい」

「この美しい国をエルフの国と同じ目に遭わせるわけにはいかんっ！ しんがりなどと思わん。今ここで、お前を葬り去ってやるぞ、オルガスッ！」

リリアナは、握った聖剣にありつたけの魔力を凝縮させた。まばゆいばかりの閃光が銀の刃から迸り、その聖なる光によって、周囲のザコオークは肉体だけでなく、魂までも消滅していく。

（私の最大最強の秘剣。今この場で奴にぶつけるっ！）

彼女が公子を戦場から遠ざけたのは、彼を想つてのことだけではない。今まさに放たんとする必殺剣は、周囲にも膨大な破壊の爪痕を残してしまう。そのため一人になる必要があったのだ。「くらすえ、オルガスッ！ 秘剣セイクリッド・ブレイズッ！」

「なっ、これほどの力が……っ。ぐああああああっっ！」

ドツツゴオツツ！ という爆音が周りに響き、煌く魔力の光線が半径二百メートル四方を消し炭に変える。

「はあはあ……仇はとつたぞ、みんなっ！ ユリアン、私はこの国を……っ」

手元に残る確かな手ごたえに、リリ

リアナは天に召されたかつての同胞たちを想い、そして、将来を誓った、愛する少年を想った。しかし、

「……残念だったな、リリアーナ」「そんな……っ!? オルガス……。がああつっ！」

光の中からグンッ！ と現れたオークの拳が、ピキニアマーの防壁を突破し、エルフ騎士の腹部を直撃する。

薄れゆく意識の中、感じたのは股下から漏れ出る小水の温もりが、大切な鎧を濡らす感触と、冷たい地面に、自らが力なく倒れ伏している感覚だけだった。

「お目覚めか、エルフの騎士団長様よお？」

「う、く……。オル、ガ……。スっ？ こ、ここはっ!?」

気づけば、そこはひんやりとした洞穴の中だった。ジメジメした感じと、冷たい水滴がポタリポタリと落ちる音が、エルフの敏感な耳の感覚に障る。

（オークたちのアジト、か？ 私は……、オルガスを倒しきれずに気絶させられて……っ）

秘剣が発した聖なる光が消えた瞬間、リリアーナが見たのは、無数のオークの死骸に守られたオルガスだった。魔法で周囲のオークたちをかき集め、自らの盾としたのだろう。生き延びるためなら、味方をも平気で殺す、オーク

キングの残虐性に怒りが増す。

身体を捻ると、少し痛みはあるが、重大なダメージはない。愛剣こそ外されているが、トレッドマークである魅惑のピキニアマーはそのまま装着されていることに、ほっとする。

先ほどの虚を衝かれたため不覚をとなが、この鎧さえあれば、物理・魔法など大抵の攻撃は防ぎきることができると。

「くっ、これは……っ。スライム、か……っ」

リリアーナを拘束しているのは、低級魔族のスライムだ。半透明なゲル状の身体をもつモンスターだが、色はリリアーナが知る青色ではなく毒々しい緑色だ。金髪のエルフは、両手を上に縛られ、下半身は卑猥なガニ股姿勢を強要されている。

オルガスの法力のせいだろう。攻撃魔法を使おうとすると、その場で魔力が拡散し、オークはおろか、スライムを跳ね除ける力さえも収束できない。

「これで私は捕えられたつもりか。いい気になるなよ。オークごときがっ。誰が貴様の妻になどなるものかっ！」

「そう言うと思つたぜ。だが今の俺様には、お前たちエルフが作った魔法の指輪があることを忘れるな。エルフが封印した邪法の数々、くく、エルフのお前にたつぷり味わわせてやるっ！」

オルガスが右手を突き出し、その中指にはめられたリングが妖しい紫の光を放射させる。

「貴様、その魔法はいつたい!? んぐ

っつ、こいつら……っ。くううっ！ 離れるおっつ！」

オルガスの力によって操られたスライムが、ウゾウゾと蠢きながら、美しい金髪をなびかせるリリアーナの顔に這いよってくる。

どうにか自由を取り戻そうと、身体を左右に動かすが、ぶにぶにした見た目に反して、スライムによる両手両足の拘束は、エルフ騎士一人の力で解けるものではなかった。

「くうっ。近づくなっ！ あ、くっ……くそおっつ！」

首を左右に振るリリアーナ。しかしネチョネチョとした嫌な感覚を肌に残し、着実に這い上ってくるスライムたち。それらはとうとうエルフの特徴でもある、横に長い耳にまで到達する。

ヌメついた魔生物が、最も敏感な尖った耳の先を伝うと、形のよい長耳がピクピクと可憐に反応し、オークたちの嗜虐心を高揚させる。

「はぐっ、ああっ……こいつら、耳の中に……っ!? くううっ！」

スライムたちが、まるで寄生生物のように、リリアーナの耳穴に侵入してくる。痛みこそないが、冷たくひんやりとした感触が、エルフ騎士の矜持を司る、脳内にまで押し入ってきた。

（な、なにをしようというんだ!? ああああ……っ。スライムが頭の中に……だっつっ!?）

それは突然のことだった。スライムの感触が、頭頂部に達したと思つた瞬

間、リリアーナの脳髓に直接、猛烈な魔法の電撃がバリバリエイツ！と連続で進む。

「おっひよおおおおおっつっつっつっ！ おおっつ、のほおおっつ！ おおほおおおおおっつ！」

一瞬、すべての感覚が真っ白になり、その直後、エルフ騎士団長の全身を内側から、猛烈な牝の快感が狂ったように駆け回った。

形のよい唇からこぼれ出た嬌声は、高貴なエルフの女騎士とは思えない、発情した牝そのものの雄たけびだ。

「ひやははっつ、始まったようだなあ！ そのスライムは宿主の理性を書き換える……いわゆる洗脳蟲つてやつだ。脳へのダメージを抑えるために、全身の感度を数千倍に引き上げる作用もあるが……。どうやら将来の愛しい我が妻は、大変悦んでくれるようでけっつこうだ！」

「おごおっつ！ ほひっつっつ！ しえ、しえんのうだとおっつ!! 感度が数千……んおおっほおおおおっつ！」

リリアーナの理性が状況を理解する前に、その豊満な身体が、めくるめく牝の快感の頂点に突き上げられる。

拘束されたガニ股姿勢のまま、魅惑の腰回りがグンツ！と前方に突き出される。ピキニアマーの内側ではつきりと盛り上がった牝の花唇から、ブシャアアツツ！と猛烈な勢いで絶頂潮吹が行われ、銀色の股間鏡に反射して、まるでお漏らしのように、股座

からポタポタと垂れ落ちる。

「こ、こんなことが……おおっ！ なぜ鏡の加護が……っ!! イ、イってる……っつ！ 私、脳内をグチャグチャに犯されながら……あああつ、まら、イグウウウツツッ！」

まるで最も敏感な子宮の中、さらにその皮を引きはがされ、剥き出しの性感帯を直接ブラッシングされているかのようにだった。

魔法から身を守ってくれるはずのピキニアマーが、噴き出す汗と愛蜜でドロドロになっていく。今や銀色の水着鎧は、誇り高いエルフ騎士を淫らに飾る下品な装飾品に成り下がっていた。

「ぐふっ、禁呪で作られた魔物に、お前の綺麗ごと魔法が耐えきれぬものか。イキすぎて狂うなよ。お前は俺様の大切な妻になるんだからなあ？」

「くっああううっ！ そんな……っ!! み、耳……っ。あぐううっ。ダメだ、そこ一番敏感で……んひひひひっつ！」

ピキニアマーの防御魔法を意に介さないスライムは、エルフの最も特徴的な部分である長い耳を、まるで耳かきでもするように、粘着質な身体をズルズルとゆつくり、ねっとりとし入れする。

「き、キモチ……イイツ！ あおおっ、スライムなどに、大切な耳っ……んひいうっ！ はあはあつ、そこそこっ！ くおっほおおおっつ！」

（こんな下等生物に、な、觸られてい

る……うっ。だが気持ちいいっ。耳弄られるの……くう、ダメなのに……すごいひひっ！）

屈辱と、凄まじい快感の光とともに、脳の最も深い部分が、オルガスの下劣な野望に上書きされていくのを、はつきりと感じる。

「おぶおおおおっつっ！ おぐっつ、おひひいっつ！ ヒグツツ！ イグウウウウツツ！」

スライムは、とうとうリリアーナの頭部全体を包み込み、二穴にまでも入り込む。くぐもつた淫狼な叫びと同時に、淫裂、そして尻穴からも、洗脳絶頂の証である屈辱の淫水が勢いよく噴射される。

吊るされた全身がビクビクと休むことなく擡撃し、ガニ股を強いられている太ももは、自らが噴き出す潮でベトベトだ。

しかし白目を剥いた瞳の奥では、強靱な理性が必死の抵抗を続けている。

「おおっつ、コ、コロシゅううっつ！ オルガスっつ。か、かなりやまず、きしやまを……んひおおおおっつ！ おおっつ、ひやぎいひひいっつ!!」

「くははっつ、わずか半日でも何百とイっているはずなのに、まだまだもな意識があるのか!! やはりエルフ、その中でもとびきりの上玉とくれば、一筋縄ではいかん。まあ、せいぜい楽しませてもらうか、ははははっつ！」

言ったオルガスが部屋を後にする。残されたのは、決して止む気配を見せない異形の洗脳調教と、それに屈しないと耐え忍ぶ、エロティックなエルフの女騎士だけだ。

（ユ、ユリアン……私は絶対に帰るぞ……っ。お前への気持ち、この国を、あんな豚どもに好き勝手されて、たまるか……あつ！）

胸に秘めるのは、大切な人たちへの想い。それだけは絶対に消させない。たとえどれだけの調教が続こうとも。

「んぎいっつ！ おひおおおおっつっ！ イグイグツツッ！ あああつ、まらイググウウウウツツッ!!」

金髪のエルフ騎士は、たった一人であれど、その豊満な女体を震わせた。

「愛する人と国のため、何度イカされようと洗脳に耐える」↓シーン4 P121へ

「耳を性感帯に調教されては、洗脳に耐えることなどできない」↓シーン5 P126へ

114

魔物を殺し人を殺して  
観客を沸かせる……  
それが剣闘士だ

殺せっ!!  
殺せっ!!  
殺せっ!!

この殺人ショーで  
市民の日々の不満を  
晴らすことで  
この国はもってこいる

ぐんぐん

明日も勝てば  
一〇〇勝晴れて  
自由の身だっ

# 闘技場に 墮ちる華

裏切りの百人隊長  
ファビオラの勝利はいっ

お呼びでしょうか  
皇帝陛下

欲望の坩堝で戦う女剣闘士  
その秘めたる思いとは!?



コロッセウム  
円形闘技場  
数十世紀も前から  
この帝国に鎮座する  
公共施設



長径1800mにも及ぶ  
闘技場は約5万の市民と  
元老院議員を収容でき  
その中心では剣闘士が  
観客へ娯楽を提供する

犯罪者か  
奴隷である彼らは  
自由を勝ち取るため  
日々殺し合いに  
挑んできた

殺せっ



私は元老院議員  
ガイウス・ファビオス・  
マキシウスの娘ファビオラ  
政争に巻き込まれ  
ここで剣闘士となった



……とっしとまっし



……とっしとまっし

……





ファビオラ  
お前は私のように  
愚かな選択はするな!!

たとえ市民のためでも  
…皇帝には逆らっては  
ならんのだ!!

お父様…

どうやら昨日の議会で  
あの皇帝を糾弾したのが  
いけなかったらしいな…



お父さまあ!!



しかしそれも明日までだ!!  
明日の戦いで私とお父様は  
自由を勝ち取る!!



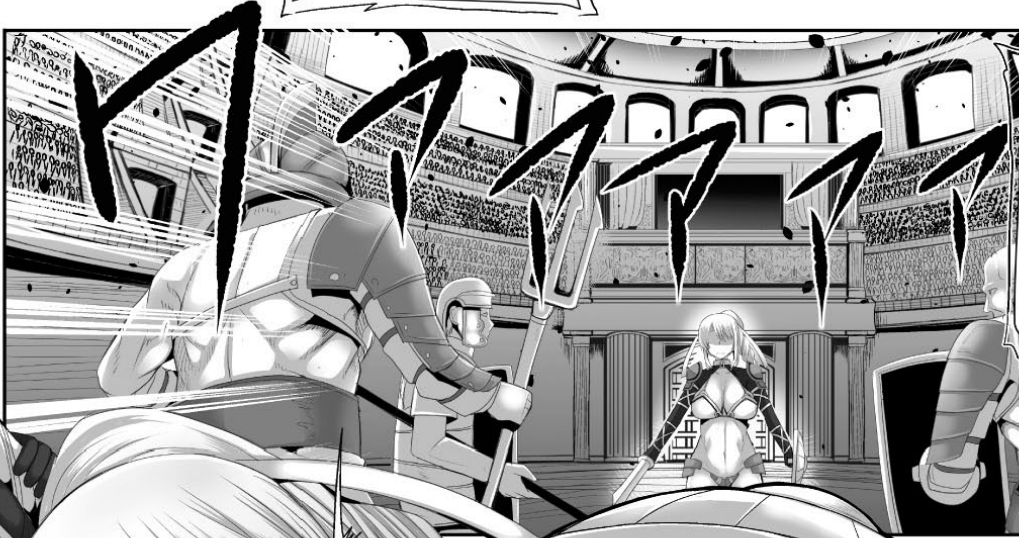
そう…  
私は愚かな選択を  
したのかもしれない



さあ剣闘士達よおつ  
魔法薬を飲んで  
存分に殺し合つて  
くれええっ!!



皇帝万歳!!  
死にゆく者達より  
敬意を捧げます!!



試合開始だああ

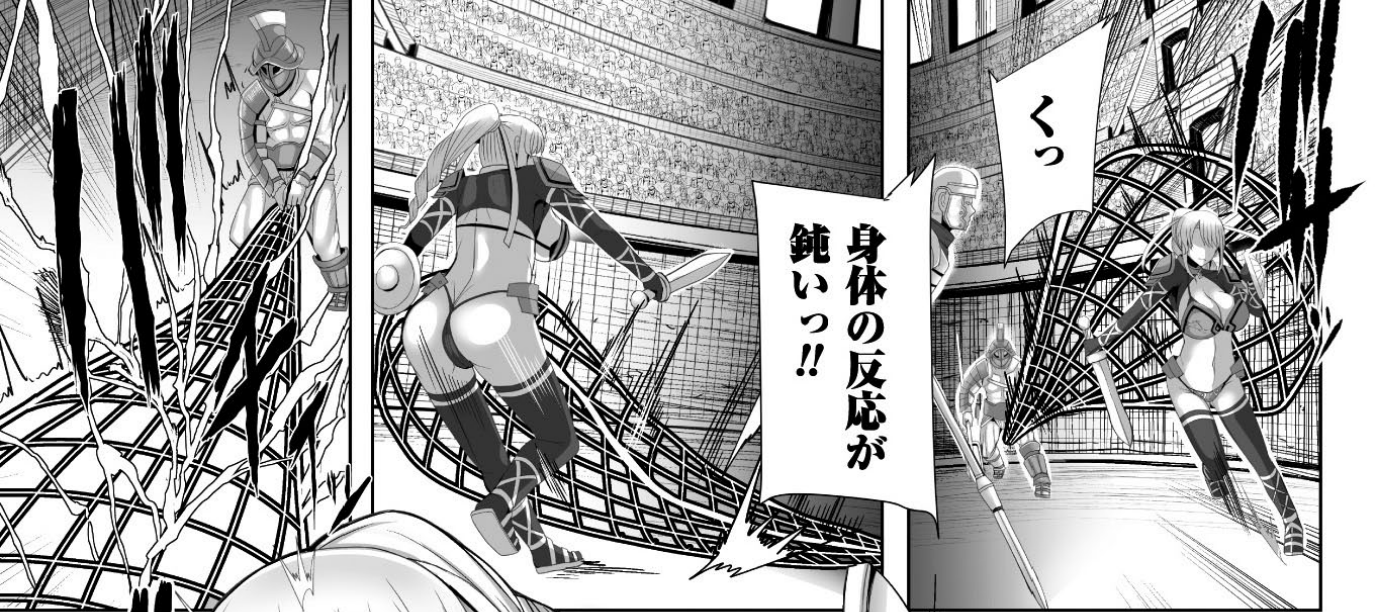


なっ何故っ  
避けたはずなのにっ!!



ハアッ





鈍いっ!!

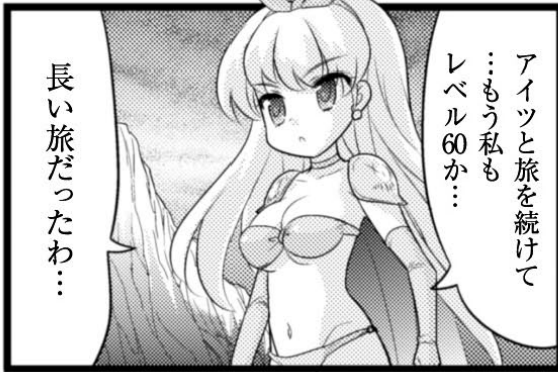


魔法薬に  
何か盛られて…

まさか……



ご無沙汰です



# いざ! マル秘イベントへ!

# あの伝説のアイテムとは!?



**イレーネ**  
勇者のお供をする女戦士  
勇者の幼馴染み。



**勇者**  
イレーネに振り回される少年。  
あまり役に立たない勇者。



何よ  
ただの  
村じゃないの!

?



あもう少いで  
例のお宝があるはずだよ!!



アンタはほんとよく  
ここまで来れたわよね...



じゃっポク  
ちよっと買い物  
してくるから!

イレーネちゃんは  
宿に入って休んでよ!

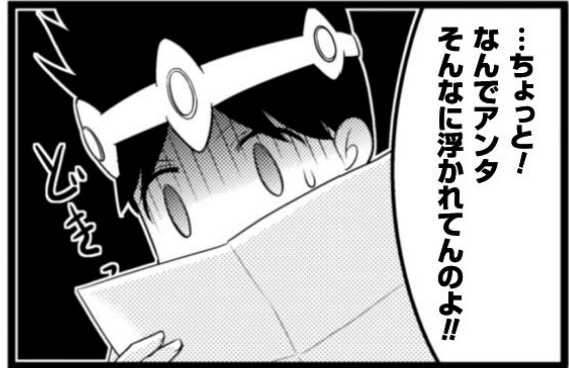


そうそうっ!  
早く早くっ!

じゃあこの辺に  
アンタが言ってた  
レアのアイテムがある  
ってことね...



...えっ  
ちよっと...まじ...



...ちよっと!  
なんでアンタ  
そんなに浮かれてんのよ!!



これが.....



あはははは  
ポクもいい加減  
イレーネちゃんのように  
強くなりたいし...!!

な...んか  
隠してるな  
なんか



# ハッキングの恥辱 の 電脳ハッキング の 捜査官 で 墮ちる 捜査官 ビキニ鎧姿で

小説 / さくら そら 挿絵 / はっせん 8000



電脳犯罪者を取り締まる  
女捜査官・七瀬に襲いかかる  
機械触手の淫獄責め!

煌々と輝く街明かりを背に、闇に紛れる黒いバイクで疾走する一つの影。しかしタイヤは回っていない、地面から三十センチほどの高さを空中に浮いたまま百キロで走り抜けるライダーは、電脳世界での犯罪を取り締まる電脳捜査官の新道七瀬。ダイブパトロール、略してDPとも呼ばれる彼女は、ピツタリと身体にフィットしたライダーズーツで首から下を覆っていた。

電脳課のエースは、無音で走るバイクを工場群の廢墟の一角に停めて踏み込む。  
「そこまでよ、神龍。大人しく逮捕されなさい」  
「ンダテメエ」

黒服にサングラスをかけた屈強な男が二人、大腿で寄ってくる。手の平サイズの棒は、スイッチを押すと光が伸びて剣になり、電流が流れるスタンソールドも兼ねる。

「ふっ」  
一つ息を吐いて目にも留まらぬ速さで油断している男に迫り、剣道でいう胴を決めると男は氣絶した。

「こいつDPか。くそっ！」  
片割れがバックステップしながらレーザー銃を抜いて放つが、見切つて半身を捻る最小動作で回避、さらに別方向からのレーザー銃を光剣で弾く。

「嘘だろ、バケモンかこいつ」  
一度身を低く構え重心を後ろに、力を溜めて足元で一氣に爆発させ、凄まじい速度で肉迫して心臓を貫いた。と

いつても電脳世界の偽体なので本人が死ぬわけでもなく、スタンソールドなので感電しているだけだ。  
（おかしいわね、取引現場ならともかくアジトがこんな郊外にあるなんて）

「ボスの朝倉はどこ？」  
十人以上の男たちが殺気を放つ中、堂々と、悠然と立つ七瀬は百六十七センチで手足はすらりと長く、しかし出るところは出ていて九十センチの乳房がライダーズーツを押し上げている。

「こないならこっちから行くわよ」  
電脳世界での人身売買や女性への暴行など、凶悪な犯罪者集団を切れ長の双眸で睨み、艶やかな漆黒のポニーテールと純白のリボンを揺らして疾駆。手前にいた男を蹴り飛ばし、左に向きながらスタンソールドを横薙ぎに振り抜き、さらに攻め立てようとしたところ

で身体の動きが鈍くなる。  
「ハッ！ せああ！ まだま、なに？」  
急に身体が強張ったところへ、大男の拳が鳩尾にめり込む。

「かはっ」  
蹲る七瀬にさらなる衝撃が襲う。ライダーズーツが一瞬にしてビキニ鎧と呼ばれる、股間と胸しか隠していないものになり、それとロングブーツのみになる。しかも下はTバックで、お尻の穴が隠せているかも怪しい細さ。

「なっ、な……何よこの卑猥な衣装は!? お尻丸見えじゃない！」  
（こんな派手な衣装見たこともないというか、何がどうなっているの!?)

雪のような白い肌が露わになり、尻房に至っては八割から九割が見えているという破廉恥極まりない姿に羞恥心を覚える。ほとんどの肌が露出して、姿を卑劣な犯罪者どもに見られて悔しくもあり、恥ずかしくもある。メタリックな触手が腕や足を拘束して奥からサングラスをかけた男が出てくる。  
「仲間のクラッカーにお前のマシンはハックされて衣装を変えられたのさ。当然それだけじゃないがな」

「アナタが朝倉ね」  
（身体が自由に動かない、これもそれが理由なの？）  
苗字しか分からず、それも本名かどうか不明な謎の多い男だ。  
「こんなソフトが売られているのを知ってるか？」  
「……？」

「現実世界の快感が電脳の偽体にフィードバックするソフトさ」  
「何を言っているの？ ……ひいつつの身体に何をした!?’’  
電脳世界へのダイブは、ゲームセンターのレースゲームを模した形状のマシンに座ってプラグを首に差すことで行われる。本来痛みや快楽はフィードバックしないし、身動きできず無防備になるので、不透過の強化ガラスの蓋をすることで誰が入っているか見えず、ナンパロックでダイブ中に危害を加えられることはない。

「何をって、今言っただろ？」  
「現実世界の快感って……不透過の強

化ガラスで誰も入れないはずよ！」  
（それに私は署内の電脳課のマシンからダイブしてるのよ!?)

「おいおいそんなエロいビキニ鎧に変更できるクラッカーが、ナンパロックくらい解除できないわけないだろ」  
「まさか、そのクラッカーが署内の内通者なの!?’’ ログアウト！」

「エラー、その行動は現在できません」  
「バカな」  
呆然と呟く。  
「それに、だからこそ一度中に入り込んでしまえば、誰にも何をされてるかバレないだろ」

（確かにマシンは肥満の人にも対応しているからゆつたりしていて、細身の間人なら二人くらい入れるだろうけど）  
私の身体が今も知らない男に好き勝手されているというの? )  
「現実の感度が十倍に変換されるからな、気持ちいいだろ」  
「戯れ言を！ こんなもの……くひいつんく、なんでもない」  
（何もされていないのにアソコと胸がジンジン熱く疼く）

「ほう、頑張るじゃねえか」  
「快感が十倍なんてソフトウエアだけで……ん、くう、できるものなの? )  
「普通のやつにはないな。だがお前の乗ってるマシン、専用機には不正プログラムが仕掛けられ、ウイルスに侵された状態なのさ。なにせ時間ならたっぷりあったからな」  
朝倉がニヤリと笑う。



(そういうえば、何度かメンテナンスと  
か言っただけ弄ってる奴がいたわ  
ね。処理速度や身体のキレがよくなっ  
てたから不満に思わなかったけど……  
この場所といい、ハメられたわね)

警察署内の電脳課の一室。それもマ  
シン内に一組の男女。女は眠ったよう  
に動かず、男は笑みを堪えきれずにニ  
ヤけながら、七瀬のライダースーツの  
ジッパーを縦型の臍まで下ろし、引き  
締まった腹筋に透き通るような白い肌  
芸術の如き身体に息を呑む。

「ごくっ。……キレイだ」

左手でGカップの美巨乳を採みしだ  
き、美しい真円を描くペビーピンクの  
乳暈とまだ柔らかい乳頭に見惚れ、ト  
ップに口をつけて舐めしゃぶり、ちう  
うと吸引した。そこまでして七瀬は苦  
しそうに呼吸が少し荒くなるが、内通  
者は気にせず張りがあり手に吸いつく  
生乳をむにゅりと捏ね、れろれろ舐め  
て肌理細かな柔乳を味わう。

「はああ……んく。んふっう」

熱い吐息が可憐な唇から漏れる。見  
れば見るほど黄金比の顔立ちを整って  
いて、吸い寄せられるように男は唇を  
重ねて舌を差し入れた。舌を絡めてじ  
ゆるずちゆと美人捜査官の唾液を吸り  
飲み、今度は自らの唾液を送り、自衛  
反応として無意識に飲み下す七瀬。

「ああ、たまんねえ」

七瀬のジッパーをさらに下ろして膣  
前庭を撫でて何度も擦りつけ、中指を

一本だけ秘裂に挿入し、柔らかくも締  
めつけてくる肉壁を弄る。

「これが七瀬のマンコか。くうゾクゾ  
クする」

愛液がにちゃ、にちゃと音を立てて  
指に絡みつき、親指で肉洞より少し上  
で輝くピンクパールを撫で転がし、左  
手はニップルを上下左右に押し倒しキ  
ュッと摘む。すると七瀬はビクッと僅  
かに反応を示して、シコシコ扱くと桃  
色吐息をこぼす。

「ひうっ、んはああ。んっん」

おそろくは寝言のようなものだろう、  
湿った吐息を狭い密室に響かせ、クラ  
ツカーはもう我慢ならんと己のジッパ  
ーを下ろして、勃起した肉棒をクレヴ  
アスに擦りつけた。

「スゲエいいカラダしてやがる、素股  
だけでイッチまいそうだ」

九十、五十八、八十七というプロポー  
ションに加え、鍛え上げた肉体系が、  
目の前で半裸を晒しているどあつては  
否が応でも興奮が昂る。

ずりずり、くちゅめちゅりど卑猥な  
音を木霊させ、胴幹部に擦りつけた潤  
滑油で滑らせて慎ましい一本筋の姫裂  
をマッサージ。女性特有の甘い体臭に  
鼻腔と脳が刺激され、理性が麻痺して  
仕事を忘れてしまいうさだつた。

「おっと、そうだった。そろそろ本業  
をしないとボスに殺されちまう」

独りごちて電脳世界を空中にスクリ  
ーンとして映し出し、七瀬と朝倉を見  
やりながらホログラムキーボードを素

早く打ち込み始めた。

クラツカーが仕事に取り掛かる少し  
前、愛撫をされた七瀬は十倍の感度に  
煩悶していた。

「あっん……くふう。身体が熱い」

やや細めの機械触手がでてきて、た  
わわに突つた肉メロンにとぐろ状に巻  
きつきぐにぐに圧搾した。

「んはあ、このっ離れて」

熟れた豊乳が捏ねられて形を歪める  
だけで快感で鼻にかかった甘い声が漏  
れ、抑えようとしても口が開いてしま  
う。腰まで届くポニーテールを振り乱  
していやいやと拒絶する。

内通者が素股を開始したと同時に、地  
面からメタリックで硬質な機械触手が  
現れ、マン筋がくつきりと浮かび上が  
つたTバック越しに擦りつけてきた。

「ふわ!? 何をしてるの、あうん振動  
してる、何よこれ」

「今現実で素股されてんのさ」

快感だけでなく実体をともなつて反  
映した無機質な触手は、鈴口のある先  
端がプブプブと高速振動して初心な  
女体を責める。立っている七瀬の股座  
をいつたりきたり、振動しながら擦り  
つけられるだけでも溢れる愛液で黒ビ  
キニ濡れて染みを作る。

「これくらいなんでもない。くっ……  
ふ。胸、触らないで」

柔らかくも弾力のある肉釣鐘を機械  
に採まれ段々腹のように括れて前方に  
張り出す双球の、硬く痾りつつある乳

豆に震える先端が押し当てられた。

「くひひひひ乳首にい!? ンアッ、駄  
目え」

「今お前はあつちでそこを重点的に責  
められてるってことだ、面白いだろ」

「そんな、くうう……!」

(内通者に乳首とアソコを見られて弄  
られてるってこと!?)

「見ろよ丸見えのケツがぶるぶる震え  
てるぜ」

「見られて感じてんだろ」

「誰がッ……ううう、あん」

(振動が凄いい、けどそれだけよ。油断  
したところを一気に制圧する!)

大きいだけでなく形も美しい美乳を機  
械触手に採まれニップルを震わにされ、  
現実からのフィードバックも重なり、  
悔しいのに女体からは悦び声が漏れる。

「そこだめふにゃああ、んっんヒ」

ビキニ越しでも明瞭に浮かび上がる  
勃起肉芽に振動を当てられ、上下左右  
から重点的に責められるとカクカク空  
腰振って身悶え、肉花弁からいやらし  
い蜜がしとどに湧き出してTバックの  
ビキニ鑑が湿る。

(素股……内通者も必ずポコポコにし  
てやる)

「乳首にマンコとクリトリス震わされ  
てるだけでもうイキそうなのか?」

「そんなわけ、んひいっ」

黒ビキニ越しにヴァギナを朝倉に撫  
でられて愛液が指に糸を引く。

「ビキニ越しなのにぬるぬるだぞ。マ  
ンコぐちよぐちよに濡らして、チンポ

ぶち込んでほしいんだろ？」

「ふざけないで！ あふ、くうっ」

（こいつらの前で無様な姿なんて晒すもんですかっ！ 絶対に負けない！）

「バカみたいな顔で何強がつてんだ」

柳眉は垂れ下がりが蜂蜜色の瞳は熱っぽく潤み、可憐な唇から涎を垂らして悶える七瀬の姿に説得力はない。

「あん、……っ……っ！」

充血した粒真珠に強力な振動を当てられ、Tバックの極細ビキニ鍔では吸収しきれずに恥汁がだらだら太腿に垂れる。凄まじい快感の奔流が荒れ狂うが、絶頂だけは晒すまいと唇を強く噛み強靱な意志で抑えつけた。

（た、耐えたあ）

「へえ、あれを耐えるかよ」

「はあはあはあ。ふふ、笑わせないで。こんなことくらいで私をどうにかできると思わないことね」

「強気だな。おい、できたか？」

空に向かって問いかける朝倉に「YES」と空中に文字が表示された。

「もつと見てもらうぞ。違法エロサイトリアルタイムで配信してやるから存分に悶えていきまくってくれ」

「冗談じゃないわ、誰がイクもんですか！」

眼光鋭くキツ、と睨みつけて強がるが、それは不安の裏返しでもあった。

触手が立ち後背位になるように身体を動かし、朝倉はぬるつく極細Tバックを脇にどけて尻房に引っかけ、陰唇をくばあと割り拡げる。

「くく、今お前のマンコが奥まで何万人の男に見られてるぜ」

「嫌あつ、抜げないで見ないで」

奥まで抜げられた肉感を無修正で生配信されている事実にも、今までのように強気なままではいられたなかった。

隠したいのに巻きついた触手に拘束された両手はビクともせず、無毛の恥丘に視線が集中した。神龍の部下による直接的な凝視や、ここにはいない何万という熱視線まで意識してしまう。

「嫌と言う割に、奥からマン汁が垂れてきたぜ。とんだマゾだな」

ローズピンの肉花卉がぬらぬらと妖しくテカリ、とろりと蜜が湧き出てくる瞬間まで無修正で何万人という男に見られた。恐怖が興奮か、ヒクヒク震える淫唇を至近距離で見られて羞恥の炎に身を焦がす。

いやらしい汁でぬめる肉壺に狙いを定めた無機質な銀色の触手が、長い胴体を蛇のようにくねらせて這い寄り姫割れに挿入ってくる。

「まさか……っ、だめよそこは。んんんつ太いのが、うは奥まで」

「あつちで挿入されたみたいだな」

「挿入つてまさか……本当に？」

「目の前にお前ほどの美人が無防備に寝てりや襲いたくもなるだろうさ」

「絶対に、くうん許さないわよ！」

無防備な己と押し掛かる男を想像して怒りが湧き上がる。

カリ首のない機械蛇が七瀬を立ちバツクで突きまくり、硬質で体温のない

先端が温かい媚肉を穿ち高速振動しながら牝汁を掻き出す。

「おひ？ あんあんなにこれ、こんな知らない」

振動しながら抜き差しする未知の激悦に怒りを押し流され、美女捜査官は惑乱に陥つた。

「ハハハ聴こえるか、このやらしい音が。ぐちよぐちよ鳴ってるぜ」

大量に湧き出る恥粘液でぬかるむ女陰を機械で扶られ、ぐちゅりと湿った淫靡な旋律に耳を赤く染め身悶えた。

「嘘よ、こんなのあり得ない。絶対に逮捕、あつあんたくて長い……はひっ身体の中から震わされるのだから」

「挿入つてるのが丸見えだぞ、DPPがエロい姿を配信されて喜んでやがる」

（気持ちよくない、気持ちよくなんか……なのに、大勢に見られてると思うと……っ）

見られていると想像すると背徳の炎で理性が炙られる。

ビキニ鍔ごとぶるんぶるん暴れる肉ロケットが男を魅了し、完全に勃起した乳首が痛々しいほどに布地を押し上げ、機械蛇にぎゅむりと捏ねられる乳

悦に喉を反らして感じ入る。魅力的な太腿に触手が巻きつき、ぷりんと丸みを帯びて張り出した白磁の尻肉を弄られてぶるっと波打つ。

細く引き締まった肉体に玉の汗が浮かび首筋から胸元や谷間を流れ、右に左に揺られてしっとり潤う黒髪尻尾の毛先から汗が滴り、牝フェロモンがもわ

つと立ち上った。

「あああん奥、子宮口突かないで、あへえ何で、突かされてるのに抜かれてる快感が……ふひゃあん」

マシンでは座席を少し後方に傾けた状態なので、対面座位と正常位との中間の体勢で抽送されており、正常位の悦楽と立ちバツクの律動で同時に異なる体位での随喜が七瀬を襲う。機械も内通者の動きと完全に同期しているわけではなく、引き抜く悦楽と突かれる悦びを同時に味わわれる。

乳峰を裾野から搾乳され、力強く打ちつけられる虐悦に理性が吹き飛びそうで、牝汁がだらりと垂れてロングブーツを汚した。

メタリックな触手がGスポットやポルチオ性感帯を震わせて鋭敏な神経群を苛め抜き、十倍の感度に変換された現実の肉悦が加わることで懊悩してよがり、猫撫で声で喘ぐ。

「ふあ、んんつあふ。んにゅう」

押し寄せる快感の波にびくびく震える女性。異常な悦楽の虜となり、いつもの凛とした声ではなく一オクターブ高い春声が廃工場に木霊する。

ガチガチに勃起した乳頭を布地の上から細触手にギュリィッと思いきり捻られ口の端から涎を、肉鮑から濃白の本気汁を垂らして絶頂に上り詰めた。

「んい、い、い、乳首だめイク、イク！ 乳首でいくうう！」

（乳首嘯まれている、現実で絶対に嘯まれている。あおう跡残るくらい嘯んで

女だ！逃がすなあ！

下種な眷属め  
これ以上この地での  
狼藉はこの――

いやあ！

だ…誰か…！  
誰か助けてえ！

そこまです  
下種共よ！

少女よ汝の願  
聞き届けよう！

天上の王より  
遣わされた騎士  
レリリが許さん！

本誌登場村のピンチを救うは  
初見ビキニ鎧を身に纏った女騎士！

一匹残らず  
浄化してやろう！

# 天騎士 レリリ

～淫紋呪縛に墮ちた天の御使い～

りせい  
漫画 COMIC 李星



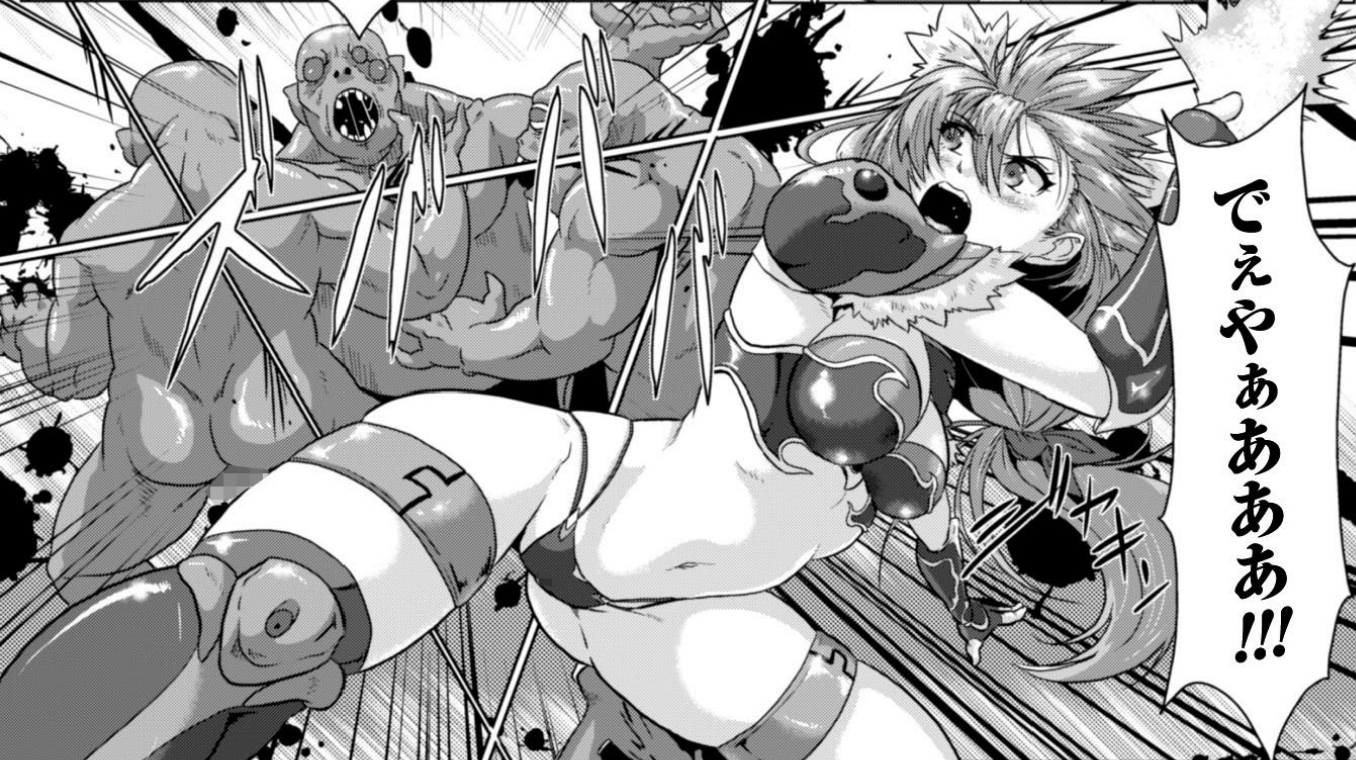
本気でいくぞ!



一瞬で片をつける!

はい!!

さあ今のうちに逃げるんだ



でえやああああ!!!



貴様は...!

相変わらず素晴らしい力だ



私の兵がこうもあっさりとやられるとは

くく...流石は天騎士レリリ



前回はこの目を奪われたが  
今回はそうはいかんぞ



海神グトウール!

性懲りもなく  
この地に現れたか!

久しいな  
天騎士レリリよ

まだ人の子らに  
手を出すと云うなら



何度やろうと  
結果は変わらない!



この…  
天騎士レリリが

ふざけた真似は…!

許さん!!!



ほら...捕まえたぞ

ググッ

グアッ

バカな...  
私がこんな  
あつさり



それはどうかなっ...!!

なっ...  
こいつ...!

私よりも  
速い...!?



我もただ  
傷を癒して  
いただけではないぞ

ズズズ

汚らしい!  
離れる! 下種め!

こいつ...  
以前よりも遥かに  
強くなっている...!?

キッ

# 勇者二匹の 倒し方

植えつけられる羞恥心に  
女勇者一行が崩壊する!?

くろな  
小説 NOVEL 黒名ユウ

にしざわ  
挿絵 ILLUSTRATION ピストンリング西沢

「……自らお出迎えとは、意外と度胸があるみたいね。迷宮の奥まで探しに行く手間が省けたわ」

そう言つて、手にした大剣を相手の胸元にピタリと突きつけたのは軽装の革鎧に包んだ豊満な身体つきの女戦士だった。

燃えるような赤い髪、怒りを湛えた大きな瞳。敵地にあつても怯むことなく胸をそびやかす姿は堂々たるもの。

「高名なる勇者ティアリス・ライオンハート様ご一行の来訪とあれば、な」

対峙する男——ロブ姿の魔法使いが応じる。突きつけられた刃など目に入らぬかのような落ち着き払った態度。それは、この迷宮の主であればこそ邪悪な魔法の力で近隣の住民らを支配してきた自信と傲慢の現れか。

闇とせめぎ合う黄金色の炎。地下迷宮のエントランスのあちこちに焚かれた篝火に照らされて、広大な空間には幾本もの柱と巨大な石像の影が揺らめき、まるで神話の世界の荘厳な神殿のようだ。だが、それはこの男、バロクが人々を脅して貢がせた財によつて築かれた邪悪の所産であった。

「金品ばかりか年端もゆかぬ少女たちまで差し出させる非道。恥を知れ！例え神が見過ごそうと、このあたしは許さない。覚悟しなさい！」

「ハッハッハ……恥を知れと来たか、それならお前はどうかのだ、そのはしたない格好は。肌も露わな、男を誘うかのような出で立ち。勇者というより、

色情狂ではないか、ハハハハハ！」

魔法使いが哄笑を放つ。

確かに、彼女は半裸も同然の格好をしていた。たわわな胸の膨らみを包み込む黒革のホルターを支えるのは、わずかな面積の真鍮製アンダーベルト。その下にうつつすらと、しなやかな動きをするであろうことは疑いようのない腹筋の縦一筋が、ヘソのくぼみを経て、これもまた黒革のレザーパンツへと吸い込まれている。くびれたウエストとは対照的に大きく張り出し、艶やかな丸みを帯びた臀部を覆うパンツにあしらわれた金属部分は申し訳程度。装飾の役目しか果たしていないように見える。スラリとした両脚は剥き身のままブーツとの間に肉づきの良いむっちりとした太腿を無防備に晒していた。

「それとも、その格好は後ろに控える金魚のフンどもへのサービスか。その尻の振り乱れる様で発奮させているのだな、クク……ククククッ」

そう言つて薄ら笑いを浮かべ、バロクがティアリスの背後の冒険者たちを顎でしゃくつてみせる。そこらの村娘ならば、この侮辱に泣き出しそうな顔で頬を染めただろうが、ティアリスは勇者、世界を旅して回る歴戦の女だ。挑発には乗らず、不敵に鼻で笑い返す。

「あたしの仲間が貴様とは違うのよ。発奮するのは邪悪を討つためだけ……お生憎様」

言いながら腕を引き、剣を構え直し、

砲弾のような乳房が微かに震えた次の瞬間、その身体は高々と跳躍していた。「てえりゃあああああああつ！」

両手で振りかぶった大剣がバロクの頭を砕かんと打ち下ろされる。その指が空を切つて魔法の印を結び、ピンクと赤の二色が入り混ざったまばゆい魔法の閃光が迸った。

「くっ……」

目が眩み、目標を見失いつつも、鮮やかに肢体をコントロールして着地する女勇者。しかし、その頭上に巨大な岩のような拳が振りかかる。「危ない！ ゴーレムだ！」

警告の叫びと共に、背後から走り込んできた白銀のフルアーマーの男が、彼女の前に立った。「……女神よ、加護の祝福を！」

素早く唱えた祈祷に反応して、彼の手にする大盾と聖鋒が輝き、見えない力で巨大な岩石拳骨の着弾をはね返す。「ドロス！ ありがとう、助かったわ」

支えてくれる。魔力を得て動き出した無数の石像が、のそり、のそりと不気味に迫り来る。と、そこへ叩き込まれる二本の大斧。

「グハハハハ！ 片付ける？ 俺にとつちゃあ、散らかすだけ！ ウォーッ」

荒々しい雄叫びと共に怪物の群れに突っ込んだのは巨漢の蛮人、ブリックだ。両手に持った戦斧を休むことなく竜巻のように振り回し、当たるを幸い敵を砕き散らす。

「敵は魔法の存在でござる！ 砕くだけでは動きは止まりません！」

「ハアッ！」

「まずはいきりたつ女勇者に、ドロスが慌てると首を振つた。冷静沈着な彼は的確な状況判断でも



狙いが外れていたか一体生き残ったゴーレムが忍者の背後から襲い掛かる。「伏せて、スケアクロウ！」

ティアリスが仲間間の危機に飛び出し、間髪を容れずに横薙ぎに大剣を払う。ズッパアアアアッ！

上半身を斬り飛ばされたゴーレムは、残った腰から下をぐらりと揺らし、地響きを立てて地面に崩れ落ちた。岩をも断つ斬撃、女勇者の豪剣。そして、鮮やかな連携。

並の冒険者なら一体相手でも手古摺るだろうゴーレムの一団を瞬殺一掃。彼女たちがこのまま迷宮を走破し、逃げた主を追い詰めるのは時間の問題のほかに思えた。しかし、魔法使いの仕掛けた罠はこれだけではなかった。

「かたじけない……」

札を言つてスケアクロウが身を起したそのとき、肉が弾けるかのような衝撃がティアリスの胸部に炸裂した。「きゃあああああ……！」

「どうした！ うっ……こ、これは！」

倒れた彼女に駆け寄ったドロスが目を丸くする。

床に仰向けになって身を反らし、悶える女勇者の乳房がはち切れそうな程に膨れ上がって——いや、違う。

「んはあああ……よ、鎧が勝手に……小さくなつていく！ あ、ああっ！」

彼女の胸が膨らんだのではなかった。その部分を覆う黒革のホルターが縮んでいるのだ、それも急激に。みるみるうちにその面積を半分にして、彼女

のポリューミーな柔らかい乳肉をはみ出させる。下半身も同様、臀部をすっぽり包み込んでいたパンツが、するするとしばみゆき、脚の付け根を大きく覗かせた拳句、みちみちと音を立てて股間に食い込んでいく。

「ああんっ……うううっ、苦しい……しっ、縮まるっ！ んくうううっ！」

——ククッ、気に入つて貰えたかな、我が魔法は？

どこからともなく小馬鹿にしたような笑い声が響く。

——その鎧は我が配下の魔物と戦えば戦うほど、そのように縮まってく。フフフ……はしたない女には躰が必要。我が下に辿り着く頃には人並に恥じらひを知る淑女に矯正されよう。

「ふざけた真似を！ こっ、これしきのことであたしが怯むとも思つたか！ 必ずお前を倒す！ 矯正されるのは……貴様だ！」

憤る女勇者。だが、魔法使いからの応えは返つて来なかった。

「だ……大丈夫か？」

「平気よ、実害はないわ……下らない魔法ね」

氣遣う仲間に強がり言つてティアリスは立ち上がった。

「それより、急ぎましょう。攫われた女の子たちが心配だわ」

そう言つて先に立ち、迷宮の奥へと歩を進める。慌てて追う三人の男たち。彼らの視線が、彼女の露出した下半身——巨大な卵の如き、つるりと滑ら

かな美尻に吸いついたようになっていくことに彼女は気づいていなかった。

※ ※ ※

鎧を縮めるだけの下らない魔法。だがそれは、襲い来る使い魔たちを退けつつ迷宮深部に辿り着いた頃、実に陰險な本性を明らかに始めていた。「くっ……」

ティアリスを集中して狙う怪物たち。その爪や牙でアーマー胸部はズタズタに切り裂かれ、倒せば更に縮まって、裂け目からいやらしく肉をはみ出させる。今やティアリスは両手で剣を持って、一方の腕で胸を覆わざるを得なくなつてしまつていた。

戦闘に乳房が揺れる度、危うくこぼれ出てしまふような乳首。剣を振るために脚を踏ん張れば、はみ出してしまふ。そうなる女の秘肉。

それを、どうしても意識させられてしまふのだ。これまで気にしたこともなかった仲間たちの視線。それが今や、痛いほどに突き刺さるものとして感じられ、恥ずかしい。

(み、見ないで……)

だが、彼女と子供ではない。男子木石にあらざると知っている。自分の肉体に目を奪われる仲間を責める気はなかった。

(みんなのせいじゃない。この下らない魔法をかけたバロクのせいよ！)

だが、その下らない魔法のおかげで、

ブリックは戦闘に集中できず、彼女のきわどい姿に気を取られては負傷し、スケアクロウの洞察眼はまさしく目を奪われた状態。そして、最大の痛手はドロスの不調だった。

「ああ、また失敗だ……加護の祈りが女神に届かない！」

今も、戦闘を終えて蛮人を介抱するために周囲に聖なる結界を張ろうとしているのだが、上手くないでいる。(なんとかしないと、このままでは) 危険だ。

しかし、どうすれば？

何か上から羽織るものがあれば隠せもしようが、そんなものはない。仲間たちの服を借りようにも、敵がいつ襲ってくるかわからぬ中で、守りの要の聖騎士の鎧を外させて着替えるわけにもいかない。忍装束は術の成否にかかわる生命線。そして蛮族はそもそも、何も着ていないに等しい。

結局、このまま戦うしかない。

だが果たしてそれでこの先、より強力になるであろう魔物たちに太刀打ちできるのだろうか？

かといつて、今更引き返すには奥深くまで入り込み過ぎている。この状態で敵の追走を受けるのは致命的だ。

悔しいが、徐々に鎧を縮めていくだけというこの下らない魔法によって、つつもさつちもいかなない状況に追い込まれたのだと認めざるを得なかった。

「ティアリス……」

「ひゃうっ！」

思いにとらわれていたティアリスはいきなりドロスに話しかけられて跳び上がった。

「な、なに……?」

「ようやく結果を張ることができた。しばらく魔物たちは僕らを見つけれないはずだ」

よい報せだったが、彼の面持ちは陰しく、ためらいがちに言葉を続ける。

「相談が……その、言いにくいことで……誤解して欲しくないんだが……協力して貰いたいことがある」

「なんでもするわ、言つて」

胸と股間を隠したままにしたものか、それとも意識してない振りをするべきか迷いながら、ティアリスは結局、身体を腕で覆ったままにしていたのだが、聖騎士は一瞬ためらった後、その手を取ると、決然と己の股間へと導いた。

「……!」

鎧に隠れて気づかなかったか、そこには硬く太く滾った男の怒張がすで外に出されて屹立していた。

「なつ……なんのつもり!!」

驚き、慌てふためく女勇者。突然の突拍子もない行為というだけでなく、それは彼女にとって初めて直接触れる異性の器官だった。

思いもかけない肉熱の激烈に心臓がドキドキと高鳴りを始める。

「驚かないでくれ、男の体はこういうもの。決してやましい心があるわけじゃない。だが、女の……ティアリスの今の姿を見ると、どうしても……」

ドロスの表情は真剣だった。

「ここさえ鎮まれば、いつものように祈りが届くようになると思うんだ」

「鎮まるって……どうすれば?」

問いかけに対し、ドロスは彼女の手をゆつくりと前後に動かして、自分のものを慰める所作をさせてみせる。

「こう……やつて……さ、さすれば鎮まる……ということ?」

顔を赤らめながら聞き返すと、聖騎士が気持ち良さそうに目を細めて頷く。

「ああ、そうすれば……男のものは、やがて精を吐く。心も暗れて、祈りも届くようになる。また戦える」

「でつ、でも……こんな場所?」

「他にどんな場所があるというんだ?」

「確かに、彼の言う通りだ。」

（ど……どうしよう?）

ドロスの言いたいことはわかった。仲間のために何でもしてやりたい気持ちもある。だが、

（男のものを……あたしの手で……）

戦いと冒険に明け暮れて生きてきた彼女にとって、初めての経験。しかし、淫らな行為であることはわかっていて、それを自分が、しかも、敵を追う最中に……! 背徳感がゾクリと胸を刺す。

行為する自らの姿が頭に浮かび、たちまち羞恥の念が湧き上がった。

そのためらいを察して聖騎士が諭す。

「いかがわしいことじゃない……僕が祈禱でみんなの傷を癒やすのと同じだ。これは仲間のために必要なことなんだ」

「仲間の……ため……」

「そうだ。そう考えれば……彼とて好きでこんな提案をしているわけではないだろう。」

仲間のため。こんな所で全滅してしまふわけにはいかないのだ。

魔法をかけたのはバロクとはいえ、自分の肉体のせいで引き起こされてしまっている事態だ。せめてその分を自身でどうにかできるのなら……。

「わ、わかった……わ……」

ティアリスは心を決め、行為をしやういようにドロスの前に膝をついた。

「こ……こうすればいいの?」

掴んだ剛直をおずおずと指の中で滑らせながら尋ねる。

「ああ……良いよ。ティアリスの手、気持ち良くて声が出てしまふそうだ」

甘い囁き声に一瞬で頭に血が上る。

（あたしなんかの手が……気持ち良いですつて?）

握るものといえは剣の柄ぐらいの自分が、男にそんな快楽を与えることができるなど、考えたこともなかった。

そのままさすりながら見上げると、ドロスは目を閉じて、うっとりとした顔をしている。

（彼のこんな表情、初めて見る……）

そうさせているのは他ならぬ自分なのだと思ふと、何か胸の奥がキュンと締め付けられる。

「もっと激しく動かしてくれないか。優しく触っているだけでは……男は、果てることできないんだ」

「う、うん……わかった……」

「あ、待つて……激しくすると痛めてしまふことがある。だから、できれば、唾液で濡らして……」

「えっ!!」

さすがに驚いて聞き返す。

「唾液って……それじゃあ!」

「言われたようにするには、どうしなければならぬか……」

「ああ……舐めるんだよ。舌でねぶつてこすりつけるんだ」

「そんな……それは……」

仲間のためとはいえ、そこまで……! 戸惑い、固まるティアリス。

そこへ、スケアクロウとブリックが気づいてやって来た。

「どうしたでござ……ややや!」

「チッ、チンポ出して何やってんだ!」

「ちっ……違うの! これは……!」

慌てて弁明しようとする。

（ああつ! み、見られてしまった!）

男……のを、握り締めているのを! は、恥ずかしい……!）

火照りが頬を熱くする。

「ティアリスに勃起を鎮めてくれるよう頼んだ。これでもう大丈夫だ」

ドロスが言葉を引き取って説明する。

落ち着いた口調で言われて、ティアリスもどうにか取り繕うことができた。

「え、ええ……ほ……他に方法は……ないでしょう?」

それを聞いて二人がおおと感嘆する。

「さあ早くティアリス、まずは僕から。みんなの分もある、急がないと」

侵入者だー!!

艶めかしいボディの  
女剣士が悪を討つ!

捕らえろ!!!

おおおおお!!!

# KNIGHTS FALL

女騎士は恥辱に墮ちる

にしだ  
漫画 COMIC 仁志田メガネ



バルデッド卿!!  
貴族でありながら  
裏で行ってきた  
様々な悪行!

既に我々近衛騎士団は  
周知している!!  
大人しく罪を告白し!



夜分遅くに  
ご苦労だな

国の騎士隊長  
ジュディ・ルセーヌ様が  
何の御用で?



罪ねえ...

愚民共から  
巻き上げた金を  
自分の好きに使って  
何の罪に  
なるのかなあ

あゝ



意識が...

毛



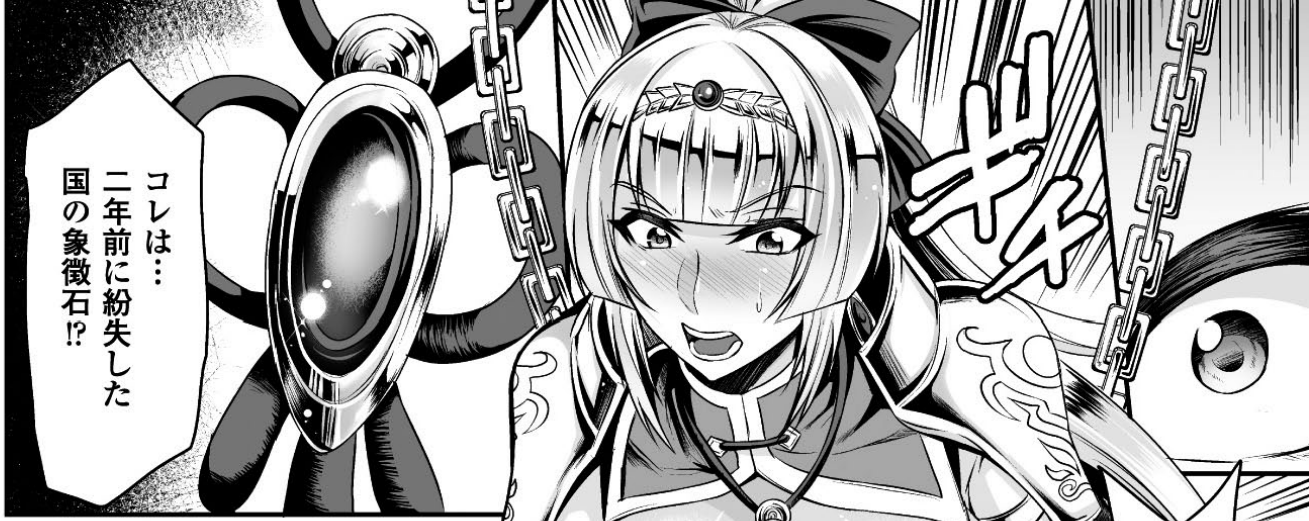
何だ?  
急に体が  
重く...



戯言をつ!!

っ!?





これは…  
二年前に紛失した  
国の象徴石!!

おん

何だこの  
鐘は…!!



私が眠っている  
間に何を…!!



お集まりの  
皆さんに真実を  
教えます!!

え…?

何だ…?



この女は町を守る  
騎士でありながら  
私や他の貴族達の  
家に盗みを働いて  
いました!!

さらには  
それだけでは  
飽き足らず—

でもあれは確かに  
国玉の…

皆さんから  
集めた税金を横領し  
自分の私欲のために  
使っていたのです!!

ミヤの…

ミヤの…

おん



何だそれは!! 私じゃない!!

私がそんな事をするはずがない!!



これは…

そしてコレも見ていただきたい!!



どうです!? これがこの女の真実なのです!!

皆さんから集めた金で夜な夜な男達を食い漁っているのです!!



媚薬だと!?

これからお前にはもっと楽しませてもらうぜ



これはちよっとした媚薬だよ



っ…貴様何をした!?

ククク…どうだいい余興だろ?

トッ



貞操帯を履いたまま犯される

屈辱の女剣士!

貞操帯を穿いた女剣士

エロエ

小説 NOVEL  
かぜまいしりこだま  
風舞尻子玉

挿絵 ILLUSTRATION  
アマミヤ



「そこだっ！」

女剣士が舞うように腕を振り下ろすと細身のサーベルが敵兵士の装甲の薄い部分を正確に捉えた。兵士はたまらずわき腹を押さえて倒れたが、その身体が地面に落ちる前に、女剣士のサーベルは次の兵士を貫いた。

敵兵士は次々と女剣士に襲いかかってくる。女剣士はその間をすり抜け、次の瞬間には回り込み、まるでダンスを踊るようなステップを続けている。そして女剣士が通りすぎるごとに、敵兵士が一人ずつ倒れていく。

美しかった。敵味方が粉塵を上げて戦う中で、その女剣士はまるで一陣の風のようなだった。

女剣士の名はエレーナ。ルスラン国で歴代の戦士を輩出している貴族の家系で、幼いころから腕を磨き、現在では国内でも一・二を争う剣士に成長している。敵であるパフィット国の卑怯な罠で父を亡くしてから、部隊の先鋒として戦っていた。

エレーナは王室とも関係が深い。王室にまだ女子がいないこともあり、国民には「エレーナ姫」「姫様」などと呼ばれ、広く愛されていた。その理由のひとつは、エレーナの美しい容姿にあった。アスリートのように鍛えられた体幹だが、胸もお尻も十分以上に熟し、女性らしい豊かな曲線を描いている。剣を振れば乳房がたぶんと揺れているが、目は大きめで愛敬すら感じ

られた。笑顔は万人が引き込まれるようなやさしさだった。もちろん戦場では、それがキリリと引き締まる。

「小娘っ！俺様が相手になろう！」エレーナは動きを止め、目を向けた。まるで熊のように大きな戦士だった。敵部隊の将のようだ。その表情は部下をやられた怒りで醜く歪んでいる。

「卑猥な格好で部下をたぶらかしやがって！パフィット軍を愚弄するのもいい加減にしがれっ！」

エレーナは思わず顔を赤らめた。身につけているビキニアーマーのせいだった。箆手や脚甲、肩当ては十分以上しつかりしたもので、箆手は盾の代わりにはえなかった。しかし胸当ては乳房を下から持ち上げる構造になっており、人一倍大きな乳房を強調している。しかも胸を隠す布はかなり小さく、たぶぷりした肉感の乳房は半分以上がこぼれ出ていた。汗をかけば乳首の隆起さえうつすら見えた。

腰には前後に装甲を纏っているが、その下は鼠径部が鋭いV字形の下穿。現在でいえばハイレグのブルマーか、競泳水着の下だけのような形だ。素材は厚めで丈夫だが、肉づきがいいため、鼠径部を持ち上げてやわらかく膨らんでいる。激しく動けば土手に続く肉が股ぐりからはみ出した。

後ろはTバックではないが、下穿はお尻の割れ目の深くまで潜り、谷間をあらわにしている。お尻の肉を隠す役目は最初から放棄しているようで、乳

房よりも豊かな尻の肉は下穿からはみ出し、太股との間にきれいな円を描いていた。アーマーで隠されているのはそれだけで、腹も、背中も、太股もむき出しだった。横からは、肌の多くを眺めることができた。

エレーナ自身、このアーマーを恥ずかしく思っていた。しかし代々伝わるもので着ないわけにいかなかったし、エレーナの戦い方にもフィットしていた。他の装甲もあれこれ試してみたが、これがいちばん動きやすく、結果として戦闘力も高かった。

エレーナが自分の姿を顧みて隙を見せたとき、敵将がまるで斧のような剣を振り下ろした。ハッと我に返り、エレーナは戦闘モードに切り替わった。身体を回転させるように剣を避けて横に移動すると、その回転のままサーベルを突き出した。敵将は振り下ろした剣を横にはらい、サーベルを弾き飛ばす。エレーナはすぐに構え直し、相手の二の太刀の下を潜り抜け、背後から首筋を打ちつけると、敵将は崩れ落ちた。それを見た敵軍は形勢が悪いと見たのだから、次第に退却していった。

翌日の軍議。何度もしつこく攻めてくるパフィット軍とどう戦うかが話し合われた。エレーナは守るだけでなく、こちらから攻めることを提案した。

「確かに兵士の数はパフィットのほうが勝りますが、あの大臣、ナザルさえ倒せば、軍は腰砕けになるはず。小数

の精銳で敵城に潜入し、夜を待って首を獲るのです」

「どうやって潜入するのだね？」

「大きな木馬を作り、その中に入ってから、敵城に潜り込みます。パフィットでは馬が戦いの神として崇められていますから、それを逆手に取るのです」

エレーナは熱く語った。

ルスラン国、パフィット国ともに小国だが、人口・面積はパフィットのほうが五割ほど多かった。どちらも岩の砂漠が国土の半分以上を占め、オアシスを中心に発達した国だった。遠くの間脈から流れてくる地下水は豊富で、農耕も行なわれている。貿易もあり、両国とも貧しい国ではない。しかしここ数年、パフィット国の水量が減っていた。農耕地を拡大しすぎたためといわれているが、本当の理由はわからない。しかし、水や農耕地が欲しいがために攻めてくるのは確かだった。

エレーナが戦うのは、ルスラン国を守るのほもちろん、パフィット国の軍務担当大臣・ナザルが、父の仇であるためだった。それが部隊の先頭に立つ理由だった。

軍議は紛糾したが、最後にはこの作戦が了承された。安全に逃走するため、支援部隊もつけることになった。

約一カ月後、出陣の朝がやってきた。すでに木馬は敵城の近くに移動させてある。エレーナをはじめとした数名の戦士が秘密裏に移動して乗り込み、敵

城に引かれていくことになって、支援部隊は夜にまぎれて城近くに潜み逃走を手助けする手筈だ。こちらも数十名と、人数は多くない。

アーマーを纏ったエレーナは、支援部隊の一人に近づき、言葉をかけると軽く唇を重ねた。婚約者のシードルだった。シードルは王家お抱えの医師の家系で、自身も優秀な医師だった。いずれ家を継ぐことになるが、現在は従軍医師の任についている。今回の支援部隊の一人でもあった。

「あの……、また、これを持っていてもらえますか？」

エレーナが顔を赤らめながら小さな鍵を渡すと、やさしく微笑んでいたシードルの顔が曇った。

「お願いだ。もう、闘いから手を引いてほしい……」

「仇を討つたら終わりにしますから」

「……、気をつけるんだよ」

婚約こそしているが、二人はまだ身体を重ねてはいない。エレーナは結婚まではきれいな身体でいたいと思っていた。それは女としての夢だった。そして、代々伝わるアーマーの下穿は、世に二つとない秘伝の貞操帯だった。闘いで負けたら捕らえられ、陵辱される可能性もある。それでも操を守るため、エレーナは貞操帯の鍵をシードルに渡し、戦場に赴くのが常だった。集まった国民の声援に送られ、部隊は出発した。

作戦は目論見どおり進んだ。木馬は疑われもせずバフィット城門をくぐり、前庭に据え置かれた。

深夜、エレーナたちは木馬からそつと抜け出した。事前に斥候が描き上げた城内の地図をたよりに、忍び足で大臣の寢室を目指した。

あと少しで大臣の部屋に着くというところで、敵兵が現われた。こちらに気づく前に、素早く戦士のひとりが短弓を構えて射った。矢は敵兵の首を貫き、声も出さずに倒れたが、場所が悪かった。階段の踊り場だったため、転げ落ちてガランガランと大きな音を立てた。すぐさま城のあちこちからざわざわと声がしはじめた。

「くそつ、退却だ！」

エレーナは他の戦士を先に逃がし、追手を足留めするため奮戦した。しかし最後は丈夫な投網をかけられ、身動きできなくなった。さらに悪いことには、逃げたはずの他の戦士や、夜になって城に近づいた支援部隊も全員が捕まり、捕虜とされたのだった。

エレーナは敵大臣・ナザルの前に引き立てられた。一枚の頑丈な板に首と両手首を挟む首枷をつけられているため、首を動かすことはできても、腕はまるで自由にならない。周りを見ると殺風景な石壁の部屋だった。牢屋にしては広い。拷問部屋だろうか。

「これはこれは、エレーナの姫様ではないですか。お久しぶりですな」

ナザルはいやらしい笑みを浮かべながら、エレーナの身体を上から下へ舐めるように眺めた。ナザルは背が低く、首が短い、筋肉質の体型だった。軍を統括する大臣ということもあり、日ごろから身体を鍛えている。

ナザルのほかに、エレーナを連れてきた屈強な兵が四名、ナザルの側近らしき男たちも四名ほど同席している。全員がナザルと同じように薄笑いを浮かべながらエレーナを眺めていた。

エレーナはアーマーを纏ったままだが、豊かな乳房も、熟した腰の張りも、装甲の上から見て取ることができた。唇を噛んで視線に耐えている。

「相変わらずお美しい。そのお姿が見たいばかりに、当方の兵は我先に戦場へ向かうぐらいですから。そういえば、乳も尻も、以前より成長されたのではないですか？」

エレーナは顔を赤くして叫んだ。

「うるさいっ！ こ、殺すなら、ひと思いに殺すがいいっ！」

「あははは……。殺すなど、とんでもございません。その代わり、死ぬより恥ずかしい目に遭わせてさしあげましょう。……、おいっ、まずはその胸当てを外せ！」

ナザルははいねいな言葉づかいを止め、側近に命じた。側近は胸当てを外そうとしたが、どうも上手くいかない。肩ヒモや裄の部分の部分が恐ろしく丈夫なので、引き上げようとすれば乳房の下に引っかかり、下げようとすると肩ヒモ

が左右に広がらなかつた。

エレーナは辱めを覚悟していた。それでも身体を弄られるのはたまらなくイヤだった。男たちが身体を探るのを、鳥肌を立てながら耐えていた。

「仕方がない。切つてしまえ」

側近が乳房を隠す布をナイフで切り取ると、ぶるんと生の乳房が飛び出した。「ほおーっ」という側近たちのため息のような声が部屋にあふれた。もう片方の胸も同じように布が切り取られた。枷のため手では隠せない。エレーナは恥辱で顔を背けた。

たつぷりとした量感のお椀型の乳房だった。布は切られても乳房を囲む裄は残っているため、乳房を持ち上げたりおやかなカーブを描きながら前方にくぶり出している。しかし張りのある肌はしつかりと乳房を支え、裄がなくても垂れることはなさそうだ。松明に照らされて赤く見えるが、肌は白く、滑らかだった。乳輪は小さめで、上品ささえ感じさせた。恥ずかしさのためか、かわいさくらんぼのような乳房がブルブルと震えている。それが乳房のやわらかさを感じさせた。

「おお、なんと美しい胸だ……」

ナザルは近づき、エレーナの乳房を玩んだ。乳房の横から下に手を回し、乳首に向かって揉み上げる。乳首をつまみ上げ、こねくり回すような指の動きで乳房を愛撫した。両手でそれぞれ乳房の重さを計るように持ち上げると、さらにゴムボールのやわらかさを

確認するように、指を食い込ませて乳房の弾力を楽しんだ。ナザルはよだれの滴りそうな笑みを浮かべている。

「重さ、やわらかさ、肌ざわり……、どれもすばらしい。ただ、熟し具合の割りには硬めようですな。まだ男遊びは少ないとお見受けしましたが……」

エレーナは虫酸が走る思いだった。まだ婚約者のシールドにも触らせていないのだ。ナザルを睨むと、その顔に思いきり唾を吐きかけた。

「相変わらず気の強い姫様ですな」

ナザルは笑いながら唾を拭った。

「では、下のほうを拝見しようか……」

ナザルは側近に腰物を脱がすように命じた。しかし装甲は外れたもの、下穿は二人がかりでも脱がせられなかった。ウエスト部がきつちり縮まり、下ろすことができない。「断ち切つてしまえ！」とナザルは怒鳴つたが、鉄よりも強い繊維で編まれた貞操帯は、剣の歯さえ欠けさせてしまった。

「残念だったわね」エレーナはナザルを小馬鹿にするように笑った。

「くそっ、僕に見せてみる」

エレーナは左右から兵士に持ち上げられ、M字開脚のように空中で脚を開かされた。エレーナは暴れたが、屈強の兵はびくともしない。

ナザルはじつくりと下穿を観察した。下穿は鼠径部にびつたりと張りつき、股ぐりから指を入れることもできない。秘溝のあたりには指が入らないほど小さな穴が三つ、お尻側にはそれより大

きめの穴がひとつ空いていた。

「ほう、これは穿いたまま排泄するための穴。ということは、貞操帯だな。しかし、実によくできてる」

エレーナは恥ずかしい観察に耐えた。ナザルの視線が貞操帯の穴から潜り込んでくるようだった。

「どれ、上から試してみようか……」

ナザルは側近に命じ、カクテルなどで使用するマドラーを用意させた。

「な、何をするつもりだ……」

エレーナはM字に開脚したまま、自分の股間にマドラーが当てられるのを見て蒼くなった。

ナザルは楽しそうに、いちばん上の穴にゆつくりマドラーを押し当てた。

「うっ！」とエレーナは呻き、腰をピクンと震わせた。いきなりデリケートな肉芽が刺激され、電気のような痺れが秘溝を襲ったのだ。さらにマドラーが軽く前後に動かされると、肉芽の快感が腰を駆け抜け、秘溝をキュッと収縮させた。

「ほう、これはクリトリスだな……」

ナザルはいやらしく笑うと、マドラーを抜き、二つ目の穴に挿した。

「ひっ!! い、痛あいつ!!」

エレーナは悲鳴を上げた。尿道をマドラーで押し広げられたのだ。物を入れるようにできていない小さな穴は苦痛を訴えた。しかしマドラーが少し抜かれ、尿道口を擦るように回されると、まるでふわっと身体が浮き上がるような心地よさが秘溝に広がっていった。

「や、やめる……、やめてくれ……」

エレーナは必死に訴えた。これを続けられたら、おしっこが漏れるような気がしたからだ。

「ふむ、これが尿道か。すると……」

三つめの穴に挿し込まれたマドラーは、他よりも奥深くまでスムーズに入っていく。膣穴だった。ナザルはマドラーをゆつくりと抽送した。

エレーナは戸惑った。イヤでたまらないはずなのに、女性のいちばん敏感な部分を擦られ、むず痒くなるような快感が広がっていく。肉芽や尿道口を弄られたせいか、普段より敏感になっているようだ。マドラーの先の小さな球が自分の中のどこにあるか、手に取るようにわかった。最初は前側の膣壁がほんのりと快感を伝えてくる。

（ああ……！ きもちいい……、だ、だめよ、感じちゃいけないの……、これじゃあ、ナザルの思う壺だわ）

エレーナは必死に抵抗した。

「い、いい加減にしろ！ そんなことをして、うれいいのかっ！」

「止めてほしいのかな？ であれば、正直に答えてもらおうか。姫様は男性経験がおありかな？」

「そ、そんなこと、言えるかっ！」

エレーナは顔を赤らめた。

「この中がどうなっても知らんぞ」

ナザルはマドラーを膣穴に深く入れ、かき回した。身体の奥に快感が広がり、エレーナの腰が震えた。

「やめる……、まだ、ない……」

「あははははは。我々をさんざん苦しめた勇ましい剣士は未通女だったのか。大したものだ。あははは……」

エレーナは悔しかつた。（結婚まできれいな身体でいたい）という思いを踏みじられたような気がしたからだ。

ナザルは側近に代わるように命じた。

「この穴で遊んでいろ。僕は、このかわいらしい口で楽しませてもらう」

エレーナはあお向けの状態で兵士に持ち上げられているため、凶器は頭上から顔の上に差し出された。

最初エレーナは、目の前に現われた太い棒状のものが、なんだかわからなかった。一瞬ポカンとしたが、すぐに理解した。ナザルの陰茎だった。それは赤黒く、胴の部分には血管を巻きつけたような凸凹がある。その先にはひとまわり太いくサビのような頭がついていた。驚くほど醜かった。

（こ、こんなのを、男の人はみんな、ぶら下げてるの……?）

エレーナが始めて目にする陰茎だった。ナザルのそれは一般的なもののよりふたまわりも長大なのだが、エレーナは見たことがなく、わからなかった。

ナザルはエレーナの頭を押さえ、唾えさせようとした。エレーナは歯を食いしばり、首を激しく振って抗った。こんなグロテスクなものを口にすると、絶対にイヤだった。

「さすがに素直に唾えてはもらえない

稀代のくのいちを手折る  
色欲に塗れた妄執



ものうきよ  
小説 NOVEL 桃生雨京  
挿絵 ILLUSTRATION ダイアル

落淫くのいち  
かえで

(思った以上に……蒸しちゃうわね。汗でもう……下着まで、ビショ濡れ)

望月かえでは音をださずに嘆息した。城主の寝所、その天井裏に潜み、四時間近くは経つただろうか。忍の衣は肌についたり張りついている。動き易くするために、袖は切り落とし、丈は短くしているが、季節は梅雨だ。湿度が高く、涼感を得るには不十分だった。(でも……我慢。長から直々の指令だもん。絶対に失敗はできない)

眼下で布団におさまっている城主が、藩内の商人と不法の薬を売買しているらしい。かえでの任務は、その証拠である密書を、忍の里の長に持ち帰ることだ。隠し場所は彼の枕元にある戸棚の中だった。

(……頃合かな。寝息にも不自然さはない。完全に、夢の中だわ)

一文銭程度の覗き穴から、再度、城主の様子を伺う。歳は五十半ば、頭はすっかり禿げあがり、酒を飲んでもいないのに頬は真っ赤だ。首が埋まるほどの二重顎が、髪の上にふるえている。その醜さに耐えられず、かえでは目を背けた。

(はやく終わらせて、里に帰ろう。そして……)

首元で切り揃えた黒髪をそつと撫でる。指先に花の髪飾りがふれた瞬間、かえでの引き締まっていた頬が緩んだ。(京さまに会って……ふふっ)

脳裏に浮かぶのは、長の息子である、望月京の姿だった。この指令が終わったら、かえでは彼と祝言を挙げることになっていった。くのいちとして生き、今年で十六歳となるが、まさか自分が女の幸せを得られるとは思っていなかった。

(ダメダメ、今は任務に集中しないと)

首を左右に振った。身の最終確認をする。依然、汗の滴りが物凄い。腋や股の間、鎖帷子に包まれた乳房は、又ルヌルだ。だがこればかりはどうすることもできない。諦めて、天井の戸板を慎重に外した。

(参るっ！)

かえでは天井裏から飛びおりた。忍の技を使い、音をたてずに着地する。城主の顔を窺って、目覚めてないことを認めた。すばやく戸棚の前へ移動し、中を檢める。

(あつた。これで間違い……ないわね)

折り畳まれた手紙を発見した。手に取り、ざつと斜め読みして、懐にしまった。

(もうここに用はないわ。さつさと脱出しよ——)

両膝を曲げ、力をこめた瞬間だった。戸棚の方から勢いよくなにかが飛びだしてきた。

(買った?! くっ……!)

それは細い糸だった。一本ならばまだしも、数え切れない程の量がかえでの四肢に絡みつき、自由を奪った。畳

の上へ倒れてしまう。

「ほほっ、蜘蛛の巣」に獲物がかかつたと思つたら……なんとも愛い子猫じゃわい」

粘り気のある声が響いた。城主が布団から起き、かえでの前に立つた。卑しい笑みを浮かべ、垂れた目で肉体を眺めてくる。

「くのいちにしては、乳も尻も随分重そうじゃ。いや……房中で男を誑かすにはかえつていいのかもしれない。ひひっ……見ているだけで猛つてくるわ」城主が口にした言葉に、かえでは肩を軽く揺らした。

(反応しちゃダメ。落ち着かなくちゃ)

それでも、事実を指摘されて、心中は穏やかではなかった。背丈は同年の女子より低いのに、胸や臀部の肉は異様に実ってしまった。人目を引く恥ずかしさもあるが、くのいちの任を遂行する際、プルンプルンと弾み、邪魔に感じていた。

「天井裏に隠れておつたか。埃だらけじゃが……汗でいい具合に蒸れとるの。女壺の方はどうじゃ? 僕の魔羅でたしかめねばの……ほほっ」

城主が浴衣の帯を緩めた。毛で覆われた厚い胸板と、太鼓のようにふくらんだ腹が現れる。そしてその下には、こけしを想起させる一物が、天井向かつてそそり勃つていた。

(いやっ! ……おぞましい!)

頬が急激に熱くなるのを感じた。城主から顔を背ける。

「……なんじゃ。初心な反応をしおつて。いっぱしのくのいちが未通女なわけでもあるまいに。それとも、それも秘技のひとつなのかの」

顔はますます熱くなる。城主のいうとおり、かえでは処女だった。房中術はくのいちの必須技術だが、習うことも拒みつづけた。そんなものに頼らずとも任務は遂行できると、体術や忍術を磨き、成果をあげていた。

(わたしは絶対に、穢れるわけにはいかないんだからっ!)

京の姿を思い浮かべると、闘志が湧いてきた。糸で拘束されているので、腰の忍刀は掴めない。しかし、関節を外せばそれも可能になる。悶えるような痛みを代償にすれば、だが。

「……ッ!!」

「なっ?! ぐっ……がはッ!」おそらく、城主にはなにが起きたかわからないだろう。かえでは一瞬の間に、肩と腕の関節を外し、糸の縛めを解いた。関節を元に戻すと、激痛に顔を歪めながら、忍刀で残りの糸を断ち切った。そして、城主の鳩尾と股間に、一発ずつ打撃を放った。

「安心して、命まで獲らないわ。ただ……あなたのそこ、二度と使い物にならないかもね」

捨て台詞は、城主の巨体が畳に倒れる音でかき消えた。

(急ごう。追手がこないうちに)

肩と腕を痛めてしまったため、天井裏の脱出路は使えそうにない。危険は

あるが、廊下を進んでいくしかなさそうだ。淡い月光がこぼれる、障子戸の方へと向かう。しかし、そこに人影が映り、かえでの足が畳に張りついた。

「くっ！ やるしか……えッ!?」  
腰を深く落とし、忍刀の柄を握り、いつでも飛びだせる姿勢を作った。だが、戸が開き、そこに現れた人物を目にした瞬間、かえでは固まってしまった。

「お……長？」

腕むだけて命を奪えるのではないかと思う程の、鋭い眼光。過去の合戦で負った、頬の傷。筋骨隆々とした体軀は熊を思わせる。間違いない。かえでの前に立っているのは、忍の里の長であり、近いうちに義理の父となる、望月豪だった。

（どうしてここに？ まさか、わたしの応援に？ いえ……）

そんなはずがなかった。忍は原則、単独で任務にあたる。里からの信頼が厚いかえでに、豪自らやってくるわけがない。ならば、よほど緊急の伝達があるのか。

（……違う。いや、うそ……でしよ）

心で否定の言葉を吐くが、忍刀を静かに引き抜いた。豪の目を見て、彼がこちら側でないと悟った。それと同時に、畳を思いきり蹴った。

「長っ！ なぜですかっ！」

返事はなかった。豪もかえでの方へ飛びだし、忍刀を振ってきた。刃が重なり、火花が散る。

（……乱心じゃない。長は、本気でわたしを……）

罅迫りあいをしてたら、豪の敵意が流れこんできた。その凄まじさに背がゾツとした。

（わけがわからないけれど……このままだと、殺されてしまうっ！）

「ノウマク・サンマンダ・バサラダン——」

かえでは空いている手で印を組み、不動明王の真言をすばやく唱えた。自分の左右に影分身が現れる。

（長を相手にこれ以上増やしたら、思ったとおりに動かせない。なんとか隙を作って……!）

四十代半ばで、第一線から退いているが、その実力はおそらく国内随一だ。筋力、経験の差はあまりに大きく、長期戦は絶対に避けなければいけない。一瞬できめるしかなかった。影分身と共に、三方向から豪を攻撃する。

「ぬうっ……!」

無表情だった豪の顔に、わずかだが焦りの色が滲んだ。口からうなり声も漏れた。

（いける……!?!）

だがやはり、駄目だった。第六感を鍛えた忍は視覚に頼らず、発達した触感で、敵の位置を知る。豪の斜め後ろ、真上から襲わせた影分身が一蹴された。

（諦めないっ!）

かえでは怯まずに、豪へと飛びこんだ。一秒にも満たないが、影分身に応戦しただけ、彼に隙ができたことを信じて。

「覚悟っ!」

忍刀の先端が、豪の腹に刺さる——はずだった。

「甘い」

腕の長さが圧倒的に違った。かえでの首が豪によつて掴まれ、そのまま持ちあげられた。振った忍刀が空を切る。

「……失望した。もう少しできると思ってたぞ」

感情のない声が響く。丸太のような腕が、かえでの腹へ一直線に飛んできた。

「……なっ?! うっ……グウっ!」

しかし、豪の正拳突きは虚空を打った。逆に、彼の腹に忍刀が刺さっていた。

「長……わたしの勝ちです」

「……くっ、影渡り、かっ!」

人間に魂と呼ばれるものがあるならば、影渡りはそれを証明することになる。用意した影分身に、本体のすべてを移してしまおうのだ。緊急回避や敵の不意を突くのに、絶大な効果を発揮するが、失敗したら命を落としてしまう

高難度忍術。交戦中に使える忍は、片手で足りるほどの人数だろう。

（まさか……わたしが、長の命を……）

苦悶する豪から視線を反らす。忍刀を握りなおし、より深く突き、九十度捻った。内臓が千切れる感触が手に伝わってきた。

「……長、最後に教えてください。なぜ、このような——おごうッ!」

なにが起きたのだろうか。突然、豪の姿が消えた。そして次の瞬間には、腹に強い衝撃がやってきた。かえでは立っていられず、その場に崩れ落ちてしまう。

「前言は撤回しよう、かえで。お前ほど見事な忍はいない。ゆえに……残念だ」

豪はかえでの横に立っていた。悲しげな表情でこちらを見おろしている。

（……か、影遊び……!）

凄腕の忍が直接ぶれても、それが偽者だと気づかない、超高密度の影分身を作る。それだけなら、かえでにもなるとかできるレベルだが、影遊びの真骨頂は遠隔操作にある。どれだけ距離が離れていようとも、その影分身を自在に操ってしまうのだ。人と会話をさせ、戦闘にも用いる。神業に近い超絶的な忍術に、そこへ至れない忍たちが嫉妬の念をこめて、遊びの字をあてがったといわれている。

（京さまっ……）

愛する人の名を胸中で叫ぶ。かえでは意識を失った。

2

「おのれ……この小娘めっ! 儂の一脚を足蹴にしおって! 今に見ておれよっ!」

城主が憎々しげにいい放ち、かえでの頬に唾を吐いた。彼女は気絶したまままだ、腕は吊るされ、畳の上に膝を崩

して座らされている。

(下郎郎……いや、俺がいえることではないな)

豪は城主と共に、城の地下へと移動した。彼の自室から通じる秘密通路を抜けると、石の天井と壁に囲まれた、座敷牢に至る。そこは、不自然な甘ったるいにおいに満ちていた。

「ほれっ、はよう薬を塗らんかっ。やさしゅう……手と舌で、丹念にじゃっ」

その声に、暗い廊下の奥から、少女が二人やってきた。なにも身につけておらず、発育途上の乳が丸だした。酒に酔ったような表情を浮かべており、目の焦点があつていなかった。

(……噂に聞く催淫薬か)

少女たちは豪に見向きもせず、城主の足元に跪いた。そして、自らの手と舌に軟膏を塗り、城主の男根へ奉仕をはじめた。

「おお……そうじゃあ。ええぞお……滾つてくるわい」

聞くに耐えないあえぎ声が響く。かえでの一撃をくらい、萎れていた竿肉が天を仰いだ。

(たいした効果だが……これも禁薬だったな。まったく、業の深い男だ)

豪は城主から視線を外し、かえでの前に膝をついた。城主が吐いた唾を指で拭つてやった。

「かえで……」

くのいちには闇に生きる女だ。肌は荒れ、髪は乱れる。任務の際は、房中術のことも考え、化粧で取り繕う。

(どうしてお前は、こんな……美しいのだ)

かえでにはなんの誤魔化しも必要のない。桜色の唇はいつも潤み、ふつくとした頬は血色がよい。髪は艶やかに輝き、絹のようだ。

(それだけではない。なんと……男を惑わす、躰をしておるのだ)

小柄な躰にそぐわない乳房は実に豊満で、鎖帷子が弾けとんでしまっただ。丈の短い忍の衣からは、ほどよく締まった太ももと、汗を吸い、蒸れた白布が覗いている。豪は大きく喉を鳴らした。牡の本能が蠢き、股間に血が集まつてくる。

(本物の下郎は、業深な男は……俺だ。娘のように育ててきたお前を……息子の嫁となるお前を……)

かえでは孤児だった。山に捨てられていたところを豪が拾い、忍の里で育てた。彼女に忍の才があることはすぐにわかり、十を超える頃には名の知れたくのいちとなつた。

(しかし……お前も悪いのだぞ。房中の訓練を拒みつつおつて。それができれば……俺も、ここまでは……)

かえでの乳や尻がふくらみはじめたのも、その時期だ。豪は彼女の第二次性徴に、男として反応してしまった。意識するなど、自分に何度いい聞かせても、無理だった。

(……すまぬ、かえで、京。俺は……鬼となる)

豪はその場にゆつくりと立った。忍

の衣を脱ぎ去り、全裸となつた。牡の肉はすでに硬くなつており、我慢汁をしとどに垂らしていた。

「……ん。あ……こは？」

かえでが目を覚ました。呆けた顔が豪の方を向く。

「お……長っ！ ひうっ……！」

一瞬で、かえでは覚醒した。頬を朱に染め、いきり勃つた肉から目を反らした。だがすぐに、先の戦闘を思い出したよう、豪を睨みできた。

「……どういふことなのですか」

「嵌められたのじゃよ。お主が父と敬うこの男にのう……ひひっ」

大きな足音を鳴らしながら、城主が戻ってきた。彼も全裸になつており、股間では怒張が脈打つていた。蠟燭の灯りを受けて、女の涎と男の生殖器が輝いている。

「う……うそだっ！ でたらめをいふなっ、この下種めっ！」

かえでが反論する。彼女の腕を拘束している鎖が、耳障りな金属音を鳴らした。

「偽りの指令で僕の城に向かわせ、牢に幽閉。里には任務中に命を落としたと伝える。全部……こやつが計つたことじゃ。僕は、ある条件と引き換えに、応えただけよ」

城主の種明かしに、かえでは絶望の表情を浮かべる。そのまま、豪を見つめてきた。

「……否定してください、長。この男の戯言を、笑ってください」

濡れ、ふるえる瞳を、とても見られないなかつた。豪は忍刀を引き抜き、かえでの胸元にあてた。

「……許してくれとはいわん。受け入れる……かえで」

「長っ!! きやつ……ああっ！」

甲高い悲鳴が響く。忍の衣を縦に切り裂いた。乳房は鎖帷子に、股座は白布で覆われたままだが、素肌の露出はいつきが増えた。引き締まった腹、汗が滴る太ももが豪の視界に映る。

「おうおう……ほんにそそる躰をしとるわい。牝のにおいを撒き散らしおつてからに」

「やめろっ！ 汚い手でわたしにさわるな……あつ、ソうっ！」

城主の太い指がかえでの乳首を握ねくりまわす。敏感なそこは、鎖帷子に擦れて、ますます肥大した。

「このままにしておくのも趣があつていいが……やはり、直に採みたいの。お主も窮屈でならんじゃろう。ひひっ……今、薬にしてやるわ」

鎖帷子が強引にずりおろされた。汗の雫を散らしながら、真つ白の乳肉が弾みでる。

「やつ……!! いやっ！ 見るなっ……さ、さわつ……ああっ！」

かえでの乳房は、城主の大きな手にもおさまらなかつた。指と指の間から、餅のような肉が溢れた。

「おおっ、この手に吸いつくような感触……!! ずっしりくる重さもたまらんわい」

城主が涎を垂らして悦んだ。かえでの片乳を乱暴に揉みしだく。

「なんじゃお主、さつきより乳首が硬くなつてるではないか。僕の掌を押し返してきとるぞお」

熟れたさくらんぼのようになった乳頭を、城主が執拗に扱く。そのたびに、かえでは啼き、細い腰を揺らめかした。

「どうやら被虐の趣味があるようじゃの。ええことじゃ。すぐに……この狭い座敷が極楽に変わるぞ」

「そんなわけ……ないっ！ 離せっ！ 気持ち……悪いっ！ ううんっ！」

否定の語を吐くかえでだが、強張った表情が緩みつつある。

（この香か。女にだけ効くという、魔の催淫薬）

豪はかえでの反応を窺った。城主に乳を吸われ、イヤイヤと首を振っているが、口をだらしなく広げ、涎を溢れさせている。

「おかしいつ。こんなの……わたしつ、変だよおつ……！」

数時間走りつづけても、かえでは息を乱さない。それだけの訓練は積んでいる。だが、布団の上での話は別だ。房中術の経験もないがゆえに、ひどく混乱していた。

（そんな顔を見せられたら、俺はもう……！）

この計画を練ったのがもうひと月前になる。そこから一度も精を放っていない。豪の雄渾は反り返り、亀頭がへそを打っていた。

「もう辛抱ならんわいつ！ 一度抜かんと気が狂いそうじゃっ！」

どうやら、城主も同じ想いだつたようで、その場に立ちあがった。ぎらついた目で豪を見おろしてくる。

「約定どおり、お主に一回目は譲つてやるわい。じゃがその代わり、こやつは口は使わせてもらうぞ」

城主は赤黒く腫れた亀頭を、かえでの上気した頬に擦りつけた。

「いやあ……！ 臭いつ、汚いつ！ そんなもの……近づけるなっ！」

まだ完全に薬がまわりきっていないのだから。かえでが歯を剥きだしにして、城主の男根へ吼えた。

「嘔み千切られたら敵わん。なにか術はないのか。こやつを、開けたままにしておくようなやつじゃ」

その提案に、かえでが小さく息を飲んだ。怯えた目で豪を見てくる。

（普段のお前ならば、絶対にかからぬ術だろう。しかし、疲労し、薬が効きかけの今ならば……）

豪は手で印を組み、そして、真言をつぶやいた。

「影縛り」

「ひっ……うっ、おっ……やああつ！」

食いこんでおり、そのまわりはじつとりと濡れていた。城主の希望どおりに、彼女の口も思いきり広げておいた。

「ひひっ……ええのお。これじゃ、これじゃ。涎だらけの、ええ口女陰じゃ」

城主が舌なめずりをして、かえでの横に立つた。彼の腰は女の口と同じ高さだ。そこへ股間を押しつけ、先走りの汁を口紅の如く、かえでの唇へ塗りたくった。

「かえでといつたの。いくぞお……！ 僕の魔羅を、まずは口で味わえっ！」

「おごつ！ むっ、ううう……シッ！」

豪の目から見ても、城主の男性器は巨大だ。それがすべて、かえでの唾内に入ってしまった。彼女は目を剥き、涙を溢れさせた。

「おほおつ、おほ……おおつ！ トロトロじゃあ。熱い肉がカリに吸いついてきおるわ。ええぞお……そのまましつかりと、奉仕をせいつ！」

遠慮呵責のない腰振りがはじまった。極太の性器が処女の口を犯している。その抽送回数が増えるごとに、かえでの涙と涎も多くなつていく。

「んううっ！ やっ……！ やめろつ、醜男っ！ ぐむっ……うううッ！」

かえでが必死になって叫ぶが、術は効いたままだ。城主の肉棒で喉奥を突き刺され、低い悶え声を響かせた。

（……俺が真の父ならば、ここでこの男を殺し、かえでを救わねばならないのだからな）

しかし、その気は起こらなかつた。

豪は己の性器を見やる。先より硬度が増し、鈴口から牡汁が流れだしていた（今すぐにでも、かえでを貫きたいっ！ だが、その前に……！）

かえでの股間へ視線を飛ばした。秘裂に食いこんだ下着の左右から、濃い桃色の粘膜が覗いている。豪はたまらなくなつて、床に伏せ、そこへ顔を押しつけた。

「ひうっ!! 長つ……！ いやあ……そこつ、だ……ダメえつ！」

「おつ、おおつ……！ 漂つてくるっ！ かえでの恥恥がっ！ ああ……頭がくらくらする！」

汗、恥垢、小水。それらが混ざり、揮発したにおいが、豪の鼻をくすぐつた。勿論、とても良い香りとはいえない。それでも、豪の興奮はいつきに大きくなつた。

「ぐすつ……！ ううつ、ダメ……です、やめてえ……やめて、ください！」

かえでが涙声で訴えてくる。言葉とは裏腹に、肉ピラの動きは活発になり、体液の量も増えていく。

「もつと……もつとだ！ お前のすべてを見せろつ！」

かえでの下着を掴むと、粘つこい汁が滲みでてきた。豪は大きく喉を鳴らし、それを思いきり横へずらした。

「いやあああつ！ 長つ……見ないでええッ！」

牢の中に劈くような声が響く。豪の耳にも届いていたが、聞いてはいなかつた。



お…お薬  
出ますよっ  
姫様!!

ときまるよしひさ  
漫画 時丸佳久  
COMIC

【原作】磯貝武運  
【キャラクター原案】  
成海クリスティアノート

エルフの国の宮廷魔導師になれたので  
姫様に性的な悪戯をしてみた  
THE COMIC  
第3話

…こぼれた  
お薬は指で  
すくいとって

きれいに  
舐めとって  
ください

…はい  
けっこう  
ですよ!

ザーメン姫様  
たまらねえ!

♡

わりと早く  
お薬を出せる  
ようになり  
ましたね

はい♥  
やっとコツが  
わかって  
きました♥

薬の効果を  
高めるための  
豹柄ビキニと  
ツインテール

姫様は  
今日もしっかり  
騙されて  
おりますのニヤ

では  
さっそく!

優秀な姫様の  
おかげで治療は  
順調です!

大変  
すばらしい  
です姫様♥

テコポコ  
してるご  
レロレロ〜って  
しながら  
チューチュー吸って  
あけると

ピクピクして  
ビュルビュル〜  
っ♥

お薬の出力を  
レロレロのま  
ついでです...

今日は下半身の  
矯正を仕上げて  
みましょう

は：  
はい!

はわっ

はわっ



痛くない  
ですね？

…はさり

あ…

クク

せ…

クク

ん…

クク

ん…



気持ちよく  
なってますか？

は

せ

せ

せ

ん

せ

は…

せ



これから  
刺激が強く  
なりますが…

立ったままで  
がんばって  
ください！

おえええ

うむ  
いい感じだ

は…  
はい！

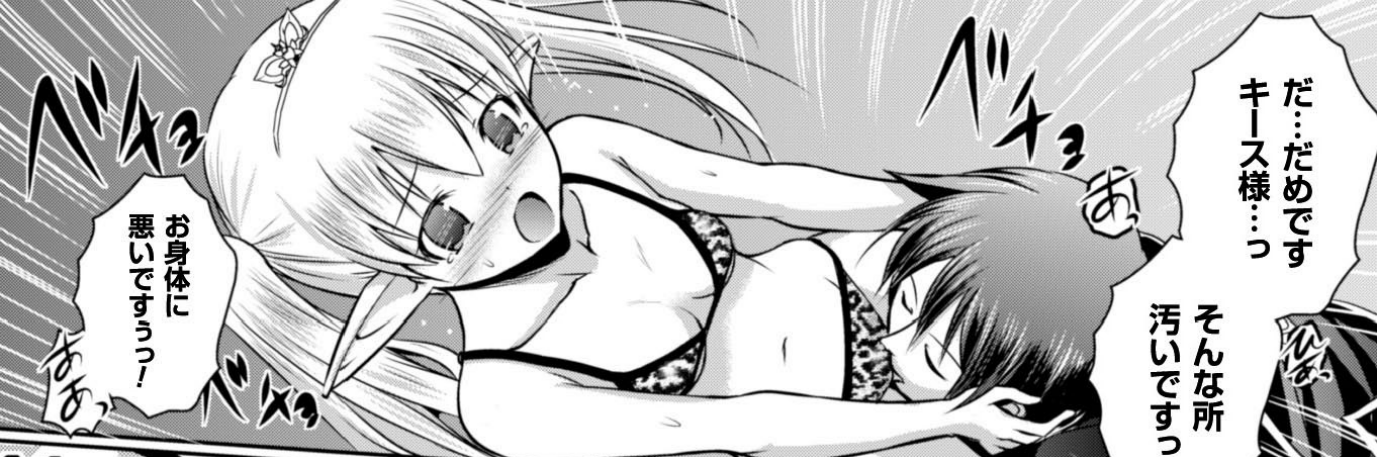
では♡

いただき  
まんこ！

ん

ん

か



だ…だめです  
キース様…っ

そんな所  
汚いですっ

お身体に  
悪いですよっ!



姫様に  
汚い所など  
ありませんっ

たとえこの身に  
何かあろうとも  
姫様のためならばっ



ああっ  
でもおっ

キース様が  
わたくしの…  
こんな…トコ  
舐めて…

恥ずかしいけど…  
気持ち…いい

ちよつと  
失礼しますよ

ひゃ…!!  
ひゃめえっ

えっ…

…うーむ  
すばらしい！

はま

姫様のお身体には  
お美しくない所が  
無い！

三つおめ

これはもう  
神が(俺に)与えた  
奇跡です

はま

そんな…  
恥ずかしい  
ですう

この俺が  
必ずや矯正を  
成功させ

このお身体を  
完璧にして  
みせます！

エロボディ  
エルフに！

キース様…

それではっ

はま

はま



曲刀使いの可憐な王女が、  
蛮族ともの下劣な肉欲にさらされる！

# 魔剣士 J-2

乙女穢されし戦場

[第5話] カーラ王女、無残

原作/ まくらカバーソフト

さか い ひとし

きりしま

小説/

酒井仁

挿絵/

桐島サトシ

ILLUSTRATION

「カーラッ！」  
トリスタン公国の領主であり、王女カーラの兄でもあるアイザックは、ヒツピアの猛将マンズールの一撃をくらった妹王女に、思わず叫んでいた。時を同じくして、南アンドレア平原ではハイランド軍とルトヴィッヒ率いる義勇軍が衝突せんとしていた、ちょうどそのころ。

砂漠の小国トリスタン公国は、ヒツピア帝国の侵略を受け、いままさに風前の灯であった。

「お兄さま、あたしのことより、御身をお守りください！」

紫色の長髪にまだあどけなさの残る顔立ち。しかしその両手に握った曲刀をひとたび振るえば、並みの男などまるで歯が立たない。

そんな双曲刀の達人カーラを追い詰めているのは、禿頭で筋肉質の大男。

ヒツピアでも獰猛な気性で知られる王家の一人。巨大なる戦斧を軽々と振り回すさまは、まるで人間台風だ。

(きよ、強化服のおかげで怪我は免れた……けど、反撃の隙がない！)

一見すると脆弱な薄布にしか見えないう強化服は、実は魔法繊維を織り込んでいて鎧並みの強度を誇る。

しかしマンズールの強撃はただの一点でそれを破壊し、カーラは露出した乳房を腕で隠している。

(こいつ、あの大きな戦斧をあんなに軽々と……しかも、狙いが恐ろしく正

確だわ)

さすが先陣を切ってトリスタン兵を蹴散らすだけのことはある。その勇猛さはヒツピア兵の士気を高め、トリスタン兵はマンズールの強さに圧倒されていた。

「くつくく、さっきまでの勢いはどうしたお姫さま。お兄さまが心配そうに見てるぜえっ！」

マンズールの声には明らかに嘲りと余裕がある。

事実、アイザックとトリスタン兵はヒツピアの軍勢に阻まれ、カーラを助けることもできずにいるのだ。

「そらそらどうしたどうした、おっぱいが丸見えになっちまうぜ、お姫さんよお！」

「くつ、やあつ！」

かろうじて身の軽さを生かして二撃、三撃をかわすものの、カーラは守勢に回らざるを得ない。

しかもマンズールはまだ本気の攻撃を繰り返してはいないのだ。

(ハイランドの援軍さえ来ていれば、こんなやつら……っ！)

そう思ってしまう自分がなによりいやだった。

トリスタンとハイランドは同盟国のはずだが、ハイランドにはきな臭い噂が絶えず、周辺国に侵略の手を伸ばしているとも聞く。

カーラとは直接の面識こそないが、ハイランドの若き知将、アレス將軍はアイザックの知己でもある。

義に厚く、剣の腕も優れ、軍の指揮も確かだと、カーラの兄はアレスを褒めちぎっていた。そんな彼ならば必ずや、同盟国の危機を見過ごしにはしないだろう。

だが、アレス將軍は謀反を起こし、ハイランドに追われているとも聞く。軍がそんな状況では、とうてい同盟国にも援軍を送る余裕はないのかもしれない。

びゅっ！ びゅわんっ。

疾風のような斧の斬撃をかわしきれず、強化服の裾が大きく裂ける。

「ああつ」

カーラはへたり込んだ体勢からすぐ立ちなおすが、マンズールはなぜか追い打ちをかけにこない。じつくりと時間をかけて、カーラを嬲りものにするつもりなのだ。

「おらおら、どうしたあつ？」

背後から斬りかかってきたヒツピア兵の剣を片手で受けたが、曲刀を取り落としてしまう。少女は片手で乳房を隠し、残る一本の刀で身構える。

「か弱い女一人に大の大人がよつてたかって、ヒツピアは臆病者の寄せ集めみたいね！」

しかしカーラの挑発を意にも介さず、男たちはにやにや笑いながら包围を徐々に狭めていく。

そう、男だらうが小娘だらうが、剣を取り戦場に立つならば、己の身を守るのはただ己のみ。少女とはいえカーラとて武将のはしくれ、それくらいは

理解している。

(そう、あたしはこんなところで、こんなやつらに負けるわけにはいかないんだっ)

「カーラさまをお助けしろ！」

「なんとしてもこの囲みを突破するのだあつ」

果敢に攻めこむトリスタン兵だが、数の上でも圧倒的な不利。

兄アイザックの、兵たちの見ている前でカーラの強化服は少しずつ剥ぎ取られていく。

いかに鎧並みの強度を持つとはいえ、幾度も攻撃されれば魔法繊維とて耐えられない。

しかもなお悪いことに、追い詰められるほどにカーラの心には絶望が忍び寄り、強化服の防御力を削いでいくのだ。とうとう下着一枚を残して、トリスタンの王女は全裸に剥かれてしまった。

「はあ、はあ、はあ……」

「そらあつ！」

大きく跳ね上げられた戦斧の一撃に、カーラはついに最後の得物を手放してしまった。下着一枚になって座り込み、両腕で胸を隠してしまう。

無力となった哀れな少女を取り囲むのは、目を血走らせたヒツピア兵の群れ。

「い、いや、こないで」

じりじり距離を詰めてくる男たちに、怯えた目を向けるカーラに、ヒツピア兵は興奮を隠せない。

「おい、そこのお前とお前！ さっきこの小娘に齒が立たなかつたな、ヒツピアの面汚しが!!」

マンズールの怒声に二人の兵が首をすくめる。確かにその二人は、カーラの双曲刀の攻撃に手も足も出せなかつた兵たちだ。

だがマンズールは兵たちを叱責するつもりではなかつた。

世にも卑劣な笑みを浮かべ、彼らにイチモツを出すように言ったのだ。

「女は男に尽くすもの。その手には物騒な刃物じゃなく、男のマラ棒こそふさわしい……貴様たち、そのことをその小娘にいやとて教えてやれいっ！」

「は、はいっ、マンズールさま！」  
へたりこんだカーラの左右に男たちが仁王立ちになると、股間のイチモツをよきりと取り出したのだ。

「ひ……」

いかに勇ましい武将とはいえ、カーラは汚れ知らぬ少女。目の前に突き出された陰茎の不気味さに怯えた声を漏らしてしまう。

「で、でけえだろ、握ってくれよ」  
脳裏に、ヒツピア兵たちに犯されていた娘たちの姿が思い出される。

(こいつら……けど、あたしをこの場で殺すつもりじゃないようね)

こみあげる嫌悪感を、しかしカーラは必死に抑える。

いますぐに自分を殺す気がないなら、ここはいったん従う振りをして反撃の

チャンスを探うべきだ。渋々差し出した少女の両手に、屹立した肉棒が握られる。

「きつ、気持ち悪いっ」

「おら、しつかり握るんだよ！ うひひひ、なかなかやわこいじゃねえか」

生まれて初めて握る陰茎は、生温かくて芯が通ったように堅く、それでいて皮の部分がぶなぶなとしていた。

これが本当に同じ人間の身体に生えているものなのかと、カーラは驚きと嫌悪感を隠せない。

「手首を動かして、ちんぽをしごくんだよ！ そうだ、いいぞ……」

「すぐにその可愛い顔をべとべとにしてやるからな！」

剣技では劣る兵たちも、強化服も得物も失った相手には尊大そのもの。

カーラの手には自分の手を重ねるようにして、かくかく自分で腰を揺すつては少女の手の感触を堪能する。

「うっひよお、これがお姫さんの手コキか！ ぎこちなさがたまらねえ！」

(手コキ……手コキって、なに?)  
どうやらこの気味悪い棒をしごくのが気持ちいいらしい。骨が入っているように弾力があり、手の中でびくびく跳ねる陰茎が不気味でならない。

「愛しいお兄さまにもたっぶり見せつけてやるんだな、お姫さん。自分が敵のザー汁浴びせられるさまをな」

また、聞き慣れない言葉、初めて握る男根は不気味に熱く、先端からは異臭が漂ってくる。

「く、臭い……ま、まだするの？」  
「ああもつとだ！ まだこんなもんじやザー汁出ねえぞ！」

いつまでこんな辱めを受けなければならぬのか。どうすればこの男たちが満足するのかわからないまま、カーラは手首のスナップを利かせる。

「かけるぞかけるぞ、そらそらっ」

「か、かけるつて、なに？ きゃあつ」  
ぐい、と大きくしごきあげたとき、陰茎が激しく跳ねた。

どくっ、どくんっ。びゅく、びゅるるるるっ。

右手のひらの中に熱い湯のようなものが迸り出て、白くて粘つこい液体が指の間から垂れ落ちる。

左手から突き出た亀の頭のような部分から、ばね仕掛けのように液体が弧を描き、それはカーラの頬や鎖骨にまき散らされた。

(うっ、な、なんて臭いな?)  
べつとりと粘り気のある白濁した液体は、カーラの白い肌へべりついている。その不気味さに、カーラは吐き気さえ覚える。

それが女を孕ませる子種汁だとは分らない。だが、自分がひどい辱めを受けたということは理解していた。

そして……その辱めが始まったばかりだということも。精液をべつとりつけられ果然とするカーラに、マンズールが悪魔のような笑みを見せ、兵たちに命令する。

「てめえら、ぐずぐずしてる暇はねえぞ！ そのお姫さんにヒツピアの洗礼をどんどんぶちまけてやれ！」

その言葉を皮切りに、ヒツピア兵たちは目を血走らせる。そして飢えた獣のように、小柄な少女に一斉に群がってきたのだ。

「お、お、俺は乳だ、お、おっばいを揉ませろっ」

「むひひ、お姫さまちゅっしうぜ」  
「んーっ？ んむう、んっ、うう！」

背後から伸びた無骨な手が少女の肉球を無遠慮に揉みまくり、分厚い唇が臭い息と共に乙女の唇に重ねられる。

抵抗しようにも、別の兵士が両手を押さえつけ、またあの不気味な肉の棒を握らせるのだ。

「カーラッ！ いま、いま助けに行くぞおっ」  
(お兄さま……見ないで……カーラのこんな姿、見ないで……)  
果敢に剣を振るうアイザックたちを、ヒツピア兵の壁が阻む。

悔しそうに見つめるその先には、ほぼ全裸に剥かれ、むくつき男に群がられた彼の妹が、恥辱の涙を流しているのだ。

男たちは両手だけではなく、カーラの美しい髪を陰茎に巻きつけ、乳首に亀頭を擦りつけ、背中にも首筋にもびしゃびしゃと生臭い白濁液をぶっつけ続けた。

「い、いやああつ。気持ち悪いものかけないでようっ」  
自分の裸身を白く染める体液のおぞ



ましさに、カーラは震えあがる。  
 (こんなことをして、こいつらはなにが楽しいの? なぜあんなに気持ちよさそうな顔をしているの?)  
 性に関してあまりに無知な王女は、射精が快楽を伴う行為であることすら知らなかった。  
 ただ、彼らは自分を辱め、汚しているのだということだけはいやというほどわかっていた。  
 「おうっ、また出る……きれいな髪の毛が俺のザーメンでどろっどろになっちゃったぜ、ひひひ」  
 「も、もうやめ……っ」  
 反撃の隙を窺うどころか、絶え間なくぶちまけられる白濁液に、少女はただ呆然とするばかり。  
 そんなカーラの前に巨大な影、禿頭の巨漢が立ちはだかった。  
 「ク……………」  
 「ぐふふふ、いい様だなトリスタンの王女。お前たちの国は、我が偉大なるヒッピアに敗れたのだ。お前はもう王女でもなんでもない、お前を俺のものにしてくれるわ」  
 マンズールは手にしていた戦斧を手放すと、子どもの腕ほどのある勃起ペニスを取り出した。  
 「ひい……………」  
 それは、ペニスと呼ぶにはあまりにも常識外れなサイズだった。  
 太さも長さも反り返り具合も、ヒッピア兵のものをはるかに上回り、赤銅色の亀頭は金属のようにてらてらと光

っている。まさに肉の凶器を前に、カーラはただ言葉を失う。  
 「ハイランドの援軍もなき今、この国はもうおしまいだ。だがお前には女にしか味わえない悦びを与えてやる。この俺、マンズールさまの、デカマラ棒でな」  
 言うや否や、マンズールのグロုပ်のような手がカーラの頭を押さえつけて、整った少女の美貌に陰茎を擦りつけてきた。  
 「うっ! く、臭いッ」  
 くつきりと太い血管が浮き上がった裏筋で、ごっしごっしと頬や額を擦ると、牡特有の野性的な体臭が少女の肌に沁み込むようで、カーラはげげほげとむせ返る。  
 「うう……………た、たとえあたしが倒れても……………ト、トリスタンは滅びたりしない……………っ。お、お兄さまがきつとあんなを倒してくださる!」  
 必死に抵抗する乙女の小さな唇に、拳ほどもある亀頭がごりごり押しつけられる。先端だけでも、とてもくわえされるサイズではなく、カーラは目を白黒させる。  
 「せいぜい抵抗することだ、トリスタンの王女。鼻柱の強い女を力づくでモノにする方が、後々の楽しみも増えるというもの」  
 げっははは、と下卑た笑い声を上げるマンズールに、ヒッピア兵たちもいよいよ意気を上げる。  
 「小娘が生意気に剣なんぞ振り回すか

らだぜ!」  
 「マンズールさま、思い知らせてやってくださいッ」  
 「どおれ、まずは自分が性奴隷になった証を刻みこんでやるぜえっ」  
 「な、なに……………きやああああつ?」  
 両手でがっちりカーラの身体を掴むと、マンズールはまるでカーラを人形のように上下に揺さぶり始めた。  
 滑らかな白い肌、ふつくらした乳房、硬くしこった乳首が肉棒と擦れ、押し寄せる牡臭と体温、先に浴びた精液の匂いで息が詰まりそうだ。  
 「小娘とはいえさすがは王族。肌の滑らかさが庶民とはまるで違うわい」  
 「いやあつ、そんなもの擦りつけないで、汚らわしいっ」  
 カーラは懸命に身をよじって逃れようとするが、体格も腕力も、大男のマンズールには敵うわけもない。  
 マンズールはカーラに己自身の弱さを教え込むかのように、細く締まった腰から脇、くりつとピンク色の乳首を亀頭でつつき、白い喉を裏筋で丹念に撫で上げ、少女を辱める。  
 「あんだ……………それでも一軍の将なの、恥ずかしくないの、この変態ッ」  
 「わめけわめけ、喚けばわめくほど、暴れば暴れるほど、お前が無力でちっほけな小娘にすぎないという証左にしかならんわ」  
 「くつ……………」  
 反論できず、カーラはただ唇を噛みしめる。そして、アイザックもトリス

タン兵もその陰惨な光景を見ていることしかできないのだ。  
 「どうだ、アイザック公! 妹姫が汚されるさまを、己の無力さを見せられる気分は! がはははは」  
 「な、なににするの、いや、いやあああああ……………っ」  
 必死に顔を背けようとする少女の抵抗をあざ笑うように、マンズールは悠然と腰を振り立てる。  
 ぶつくりと柔らかな少女の唇に先走り液が塗られたら、カーラは怖気を震うが、逃げ場はどこにもない。  
 (このままじゃ、さつきみたいなのをまたかけられちゃうの? こんな卑劣なヤツの……………そんなのいや)  
 小さな拳を何度も打ちつけるが、剣を失った少女の拳はあまりに無力。巨漢にはまったく通じない。  
 「いや……………やめ、うううっ」  
 「ぐっふふふ、いい様だな、そろそろ俺さまの子種汁をくれてやるぜ、小娘! 濃厚ザー汁を受け取れええっ」  
 「ひ、ひい……………」  
 それは、射精と呼ぶにはすさまじすぎるほどの放出だった。  
 どびゆるるっ、びゆるるっ、びゅばああああ……………っ。  
 ポンプのように肉茎が膨張し、開いた鈴口から濃厚な糊のような体液が、カーラの頭上から文字どおり降り注いだのだ。  
 「うっ、うぐうう……………」  
 目を開けることもかなわず、かろう

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**